

野芥遺跡3

第7次・第8次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集

1998

福岡市教育委員会

野芥遺跡 3 正誤表

| ページ | 行 | 誤 | 正 |
|-----|------|----------|----------|
| 目次 | 図版11 | 土器遺物Ⅱ | 出土遺物Ⅱ |
| 35 | 36 | 95など | 93など |
| 40 | 3 | 187は | 183は |
| 図版9 | | (6) SK06 | (6) SK07 |
| 図版9 | | (7) SK07 | (7) SK06 |

野芥遺跡3

第7次・第8次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集



1998

福岡市教育委員会

序 文

福岡市早良区の南部では、地下鉄3号線や外環状道路の建設などの大規模な公共事業の実施とともに、民間開発が近年急増し、昔年の情景が一変しようとしています。そのため、この地区での埋蔵文化財の調査も年々増加しております。今回報告する野芥遺跡はそのような早良区の奥部近くで行われた民間開発を原因とする2つの発掘調査の報告です。

今回報告します7次調査においては、早良区南部において初めて検出した旧石器時代の遺構と中世後半期の瓦群、8次調査においては古墳時代の水に対する大規模な祭祀遺構を発見することができました。ともに早良平野の歴史を解明するために、重要な資料を得ることができました。

今回の調査でご理解・ご協力をいただいた医療法人浜江堂及び永島常弘氏に感謝いたしますとともに、本書が市民の埋蔵文化財への理解と認識を深め、また研究資料として利用されましたら幸いです。

平成10年3月31日
福岡市教育委員会
教育長 町田英俊

例　　言

- 1 本書は早良区野芥地区における民間開発に伴い、福岡市教育委員会が平成8年度中に行った、埋蔵文化財の事前調査の報告である。
- 2 本書に掲載した写真の撮影は米倉秀紀が行った。
- 3 本書に掲載した造構の実測は米倉・清原ユリ子・土生喜代子が行った。
- 4 本書に掲載した遺物の実測は米倉・平川敬治・名取さつき・藤木聰が行った。
- 5 本書に掲載した製図は米倉・藤木が行った。
- 6 本書の遺物番号は通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。
- 7 本書の編集は米倉が、執筆は野芥7次調査の2-3の内「出土遺物」の項とまとめの一部を藤木が、他を米倉が行った。
- 8 本書に関わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

本書で報告した各調査の細目は以下の通りである。

野芥遺跡

| 調査次数 | 調査番号 | 遺跡略号 | 調査原因 | 所在地 | 調査期間 | 調査面積 |
|------|------|------|------|----------|---------------------|-------------------|
| 第7次 | 9616 | NOK7 | 民間開発 | 早良区野芥5丁目 | 1996.0701~1996.0809 | 800m ² |
| 第8次 | 9631 | NOK8 | 民間開発 | 早良区野芥2丁目 | 1996.0801~1996.0907 | 240m ² |

目 次

本文目次

序文

例言・目次

| | |
|-------------------|----|
| 1 遺跡の立地と環境 | 1 |
| 2 第7次調査 | 3 |
| 2-1 調査に至る経緯と調査組織 | 3 |
| 2-2 調査地点の位置と調査の概要 | 4 |
| 2-3 遺構と遺物 | 6 |
| 2-4 まとめ | 18 |
| 3 第8次調査 | 20 |
| 3-1 調査に至る経緯と調査組織 | 20 |
| 3-2 調査地点の位置と調査の概要 | 22 |
| 3-3 遺構と遺物 | 22 |
| 3-4 まとめ | 40 |

挿図目次

| | |
|----------------------------|----|
| 第1図 野芥遺跡位置図 | 2 |
| 第2図 第7次調査位置図 | 3 |
| 第3図 第7次調査遺構配置図 | 5 |
| 第4図 旧石器時代の不定形土坑 | 7 |
| 第5図 出土旧石器時代遺物Ⅰ | 8 |
| 第6図 出土旧石器時代遺物Ⅱ | 9 |
| 第7図 出土旧石器時代遺物Ⅲ | 10 |
| 第8図 土坑及び不定形土坑 | 13 |
| 第9図 溝の断面図 | 14 |
| 第10図 その他の時代の出土遺物Ⅰ | 15 |
| 第11図 その他の時代の出土遺物Ⅱ | 16 |
| 第12図 その他の時代の出土遺物Ⅲ | 17 |
| 第13図 第8次調査位置図 | 20 |
| 第14図 第8次調査遺構配置図 | 21 |
| 第15図 調査区北壁SD02及び調査区南壁土層断面図 | 23 |
| 第16図 SD02遺物出土状況 | 折込 |
| 第17図 SD02A群土器群出土遺物 | 25 |
| 第18図 SD02B群土器群出土遺物 | 26 |
| 第19図 SD02C群土器群出土遺物1 | 27 |
| 第20図 SD02C群土器群出土遺物2 | 28 |
| 第21図 SD02D群土器群出土遺物 | 29 |

| | | |
|------|--------------------------|----|
| 第22図 | S D02 E群土器群出土遺物 1 | 30 |
| 第23図 | S D02 E群土器群出土遺物 2 | 31 |
| 第24図 | S D02その他の上・中層出土遺物 | 32 |
| 第25図 | S D02下層出土遺物 | 34 |
| 第26図 | S D03土層断面及び同遺物出土状況 | 36 |
| 第27図 | S D03出土遺物 1 | 37 |
| 第28図 | S D03出土遺物 2 | 38 |
| 第29図 | S K06・SK07 | 39 |
| 第30図 | S D05・SK07出土遺物 | 39 |

図版目次

- 図版1 (1) 第7次調査全景 (2) SK15遺物出土状況
 図版2 (1) SK14 (2) SK11付近 (3) SK10
 (4) SK12 (5) SK13 (6) SD01・SD05
 図版3 出土遺物 I (SK11)
 図版4 出土遺物 II (SK13・16、SD01、中央包含層、表土)
 図版5 出土遺物 III (表土出土瓦)
 図版6 (1) 第8次調査全景 (2) SD02・03合流地点
 図版7 (1) 調査区南壁土層断面 (2) SD02土層断面 (3) SD03土層断面
 図版8 (1) SD02C・D群土器群遺物出土状況
 (2) 同A群遺物出土状況 (3) 同E群遺物出土状況
 図版9 (1) SD02下層遺物出土状況 1 (2) 同2 (3) SD03遺物出土状況
 (4) SD01 (5) SD04 (6) SK06 (7) SK07 (8) 同土層断面
 図版10 出土遺物 I (SD02ミニチュア土器他)
 図版11 土器遺物 II (SD02土器群出土土器)
 図版12 出土遺物 III (SD02下層)
 図版13 出土遺物 IV (SD03絵画土器)
 図版14 第7次調査出土旧石器時代遺物

1 遺跡の立地と環境

福岡市の西南部に広がる早良平野は、西は飯盛・長垂山系、東は油山から伸びる飯倉丘陵に遮られる室見川によって形成された冲積平野である。その全域が奈良時代より早良郡に属していたが、現在は福岡市早良区にその名を残すのみである。野芥遺跡はその早良平野の南東部に位置し、南北に細く伸びている。遺跡の南約1kmは油山山系の山麓である。平野の中央を流れる室見川からは約1.5kmの距離がある。遺跡は油山山系の南から西に伸びる低丘陵上を中心に、一部丘陵下の冲積地を含んだ遺跡である。丘陵部と冲積地部の比高差は最大20m近くを測る。

福岡市土地分類細部調査報告書によると、野芥遺跡の丘陵部は砂礫台地で、砂礫台地Ⅲ-1(低位段丘)を主体とし、南側に一部砂礫台地Ⅱ(中位段丘)を含んでいる。野芥第7次調査区は砂礫台地Ⅱに立地している。同調査区は鳥栖ロームを地山とし、その下に砂礫が存在している。一方第8次調査区は砂礫台地Ⅲ-1上に立地しているようになっているが、地山は砂とシルトから成り、明らかに冲積平野の土層である。西側すぐに小川が流れ、さらにその西500mには金屑川が流れおり、これらの川によってできた冲積地上に立地していると考えられる。

野芥遺跡ではこれまで6次の調査を行っているが、市営野芥住宅立て替えに伴う第4次と外環状道路建設に伴う第5次調査を除くと、調査面積が狭く、遺構の密度もそれほど高くない。今回報告の第7次調査の道路を隔てた北側に隣接する第4次調査では、古墳時代の集落・古代の大型建物群・中世後半期の池状遺構を伴った遺構群など各時期の重要な遺構が検出されている。一方、第8次調査の北側約100mに位置する第5次調査では古墳時代以降の旧河川や溝状遺構が検出されている。

野芥遺跡周辺の遺跡を見れば、西側1kmには、古代の建物群を有する田村遺跡、縄文時代後期の四箇遺跡、南西側2kmには、銅剣を持った弥生時代の墓地や5世紀初頭の前方後円墳である押塚古墳を有する入部遺跡などがある。これらの遺跡は多くの地点の調査を行っており、十分な成果を上げている。

当報告書の関連で見れば、ナイフ形石器を出土しているのは有田遺跡・飯倉F遺跡・野方勘進原遺跡・羽根戸原A遺跡・志水A遺跡など早良の丘陵・台地部を中心とした5遺跡で発見されている。

古墳時代の水利に関する溝や旧河川としては、原遺跡・次郎丸遺跡・免遺跡・野芥大蔵遺跡などで発見されており、祭祀の時期は異なっているが、次郎丸遺跡では古墳時代の水利に伴う祭祀という点で、共通点の多い状況を示している。

中世後半期は、早良平野各所で集落が営まれており、遺跡の数は膨大に上る。特に、中世末の瓦を多く出土している有田遺跡、早良平野を治める要の城とも言える荒平城址などが目立つところである。

野芥遺跡既往の調査

| 調査次数 | 調査番号 | 調査地 | 面積 | 原因 | 主な内容 |
|------|---------|-------------|----------------------|------|-----------------|
| 第1次 | 8 8 4 1 | 野芥5丁目340-1他 | 250m ² | 住宅造成 | 7世紀の竪穴住居・中世後半の溝 |
| 第2次 | 9 0 4 5 | 野芥5丁目386-1他 | 300m ² | 住宅建設 | 古墳時代後期の竪穴住居群 |
| 第3次 | 9 1 4 3 | 野芥5丁目地内 | 123m ² | 道路改良 | 弥生時代の貯藏穴など |
| 第4次 | 9 4 5 0 | 野芥4丁目地内 | 12,000m ² | 市住建設 | 弥生時代～中世の集落・公的施設 |
| 第5次 | 9 4 5 4 | 野芥2丁目地内 | 5555m ² | 道路建設 | 弥生時代以降の溝状遺構群 |
| 第6次 | 9 5 2 6 | 野芥2丁目917-7 | 231m ² | 住宅建設 | 近世以降の旧河川、突堤土器など |



- 1 西新町遺跡 2 稲崎遺跡 3 鳥道跡群 4 原溪町遺跡 5 有田遺跡群 6 鈴町遺跡 7 次郎丸高石遺跡 8 下山門遺跡
9 桥六町ツイタ遺跡 10 右丸吉川遺跡 11 庄石古墳群 12 羽根戸遺跡 13 田村遺跡群 14 吉武遺跡群 15 四助遺跡群
16 霧宿遺跡 17 青4遺跡 18 黑入部遺跡 19 長峰遺跡 20 月平遺跡 21 鞍遺跡 22 内野原田遺跡 23 驚山大遺跡
24 野中遺跡 25 谷口遺跡 26 野赤遺跡

第1図 野芥遺跡位置図

2 第7次調査

2-1 調査に至る経緯と調査組織

平成7年6月20日、医療法人浜江堂より福岡市早良区野芥5丁目地内における開発事前審査願いが提出され、周知の野芥遺跡内に隣接するため、同年7月13日試掘を行った。その結果、中世後半を中心とする遺構・遺物が検出されたため、本調査を実施することとなった。

本調査は、平成8年7月1日から同年8月9日まで実施した。当初、古代と中世のピットと土坑を検出していたが、調査後半になって、ナイフ形石器期の不定形土坑2基を検出したため、調査終了間際は慌ただしい状況となった。

検出した遺構は、古代の大型不定形土坑、中世の溝・土坑・ピットとナイフ形石器期の不定形土坑2基である。遺構に伴う遺物は少なかったが、旧耕作上中に、耕作時に掘り出したと思われる石や瓦を埋めた穴があり、その中から、多くの瓦・土器・陶磁器が出土した。

調査組織

調査委託 医療法人浜江堂

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第1係長 横山邦繼(前任) 二宮忠司

調査担当 米倉秀紀

庶務担当 西田結香(前任) 河野淳美

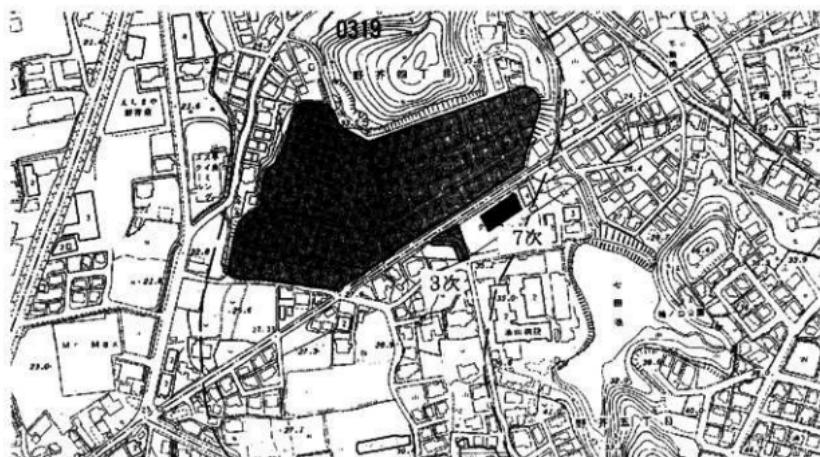
調査協力

青柳美智子 海津宏子 金子由利子 清原ユリ子 永井ゆり子 土生喜代子 土生ヨシ子

堀川ヒロ子 大穂栄子 大穂アサ子 保野志津代 永末京子 東島直美 上野道郎

長谷川律子 井笠庸子 池健助 牧之口豊子 蜂須賀博子 竹田弘子 萩本恵子

柴田加津子



第2図 第7次調査位置図

2-2 調査地点の位置と調査の概要

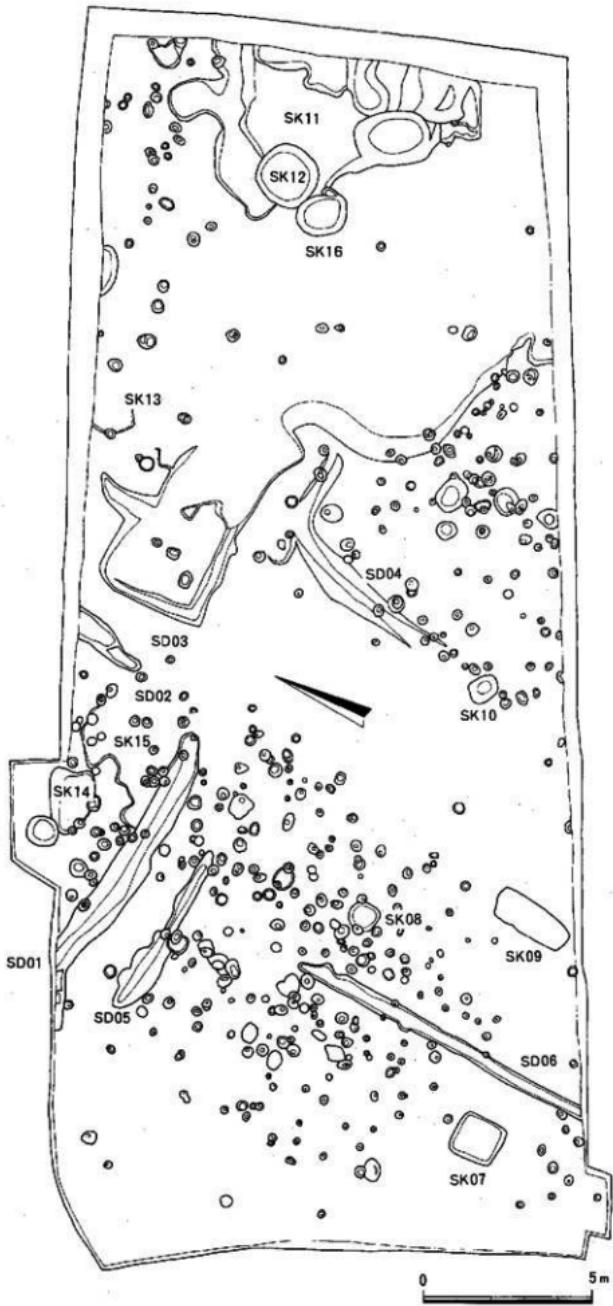
調査地点は野芥第4次調査の南側、第3次調査の東側で、野芥遺跡群の南端近くに位置する。調査地点は分布地図内の遺跡範囲外ではあるが、隣接する地区である。前述のように野芥遺跡群は台地部分とその下の沖積地部分を含んでいるが、当地点は南北に伸びる台地の頂部あたりから東に傾斜する斜面上に立地している。頂部付近では現地表面下10cmで遺構面である橙色ロームが現れるが、調査区東端では、現地表面下3mで遺構面を検出し、全体が東に向かって傾斜している。また、調査地点の西側から少し行けば西向きの傾斜になっており、当調査区では幅の狭い洪積台地となっている。

ロームは調査区東側1/3地点の、旧水田に伴う段落ちまで、それから東側は疊層である。調査区西端は、削平を受け、遺構はほとんどなかった。遺構面より上の土層のほとんどは客土と旧耕作土で、旧耕作土は棚田状になっていた。調査区東半の中央近くの狭い範囲で、厚さ5cm以内の薄い遺物包含層を検出した。出土した遺物は古墳時代後期～奈良時代の土器である。

遺構はローム層・疊層に掘り込まれており、覆土は黒色～灰色を呈している。ただし、ナイフ形石器期の土坑2基のみは、わずかに汚れたロームで、遺構面との区別は極めて難しく、2基の内、大型で浅い土坑は全形を把握できなかった。また旧石器の出土遺物はすべてドットを落としており、土坑外についても、調査を行ったが、土坑内と推察される部分以外からは出土しなかった。

第7次調査遺溝一覧

| 番号 | 種類 | 平面形 | 断面形 | 長さ(m) | 幅(m) | 深さ(cm) | 時期 |
|-----|-------|-----|-----|--------|--------|--------|-------|
| 001 | 溝 | — | 逆台形 | — | 1.07 | 25 | 中世後半 |
| 002 | 溝 | — | 逆台形 | — | 0.85 | 12 | 現代? |
| 003 | 溝 | — | 逆台形 | — | 0.8 | 14 | 現代? |
| 004 | 溝 | — | 逆台形 | — | 1.13 | 15 | 現代? |
| 005 | 溝 | — | 逆台形 | — | 0.79 | 14 | 中世後半 |
| 006 | 溝 | — | 逆台形 | — | 0.57 | 4 | 現代? |
| 007 | 土坑 | 長方形 | 箱形 | 1.42 | 1.32 | 17 | 現代? |
| 008 | 土坑 | 円形 | 逆台形 | 0.85 | 0.84 | 10 | 現代? |
| 009 | 土坑 | 長方形 | 逆台形 | 1.60 | 0.97 | 6 | 現代? |
| 010 | 土坑 | 卵形 | 逆台形 | 0.9 | 0.7 | 48 | 中世後半 |
| 011 | 不定形土坑 | 不定形 | 階段形 | (8.0) | (5.82) | (40) | 古代 |
| 012 | 土坑 | 円形 | 逆台形 | 0.9 | 0.7 | 30 | 中世後半 |
| 013 | 土坑 | 楕円形 | 箱形 | (1.52) | 1.0 | 10 | 中世中頃 |
| 014 | 不定形土坑 | 不定形 | — | 2.0 | 1.33 | 43 | 旧石器時代 |
| 015 | 不定形土坑 | 不定形 | 逆台形 | (5.8) | (2.6) | (25) | 旧石器時代 |
| 016 | 土坑 | 横円形 | 逆台形 | 1.47 | 1.17 | 40 | 中世後半 |



第3図 第7次調査遺構配置図

2-3 遺構と遺物

検出した遺構は、中世の土坑4基、溝2条、ピット、古代の不定形土坑1基、旧石器時代の不定形土坑2基である。出土した遺物は、前述のように遺構に伴うもの以外に、表上から多くの瓦や陶磁器等が出土し、出土遺物の大半が表土出土遺物である。

(1) 旧石器時代の遺構と遺物

不定形土坑

S K14(第4図、図版2)

調査区中央の北壁に接して発見した。発見時は、半分のみの検出で、調査最終日に調査区を拡張して、全形を把握した。覆土はやや黒みを帯びたロームで、地山との差は明瞭ではないが³、後述する S K15に比べると、検出し安かつた。当初旧石器時代の遺構と氣付かなかつたため、1点を除いてドットは落としていない。平面形は卵形に近い不定形で、断面形は概ね逆台形を呈する。長さ2m、幅1.33m、深さ43cmを測る。

S K15(第4図、図版1)

調査区中央よりやや北側で検出した。まず土坑の西側ラインを検出し、順次土坑の検出に努めたが、約半分は検出しきれなかった。覆土はやや黒みを帯びたロームで、地山との差は明瞭ではない。遺構ラインが明瞭ではなかつたため、土坑内と推察した範囲とさらにその外側6m前後の範囲にグリッドを設定し、ドットを落しながら掘り下げたが、ほぼ土坑内と推察した範囲内からしか遺物は出土しなかつた。検出した土坑西側のラインは、出入りが激しく、床面もやや凹凸がある。深さは10~15cmとあまり深くない。これに、遺物の出土ドットを重ねると全形は大略卵形を呈し、深さはもっと深いところで25cmを測るなお土坑西側ライン近くは、当初旧石器時代の遺構とわからなかつたため、ドットを落としていない。土坑の推定長約5.8m、幅約2.6m、深さ約25cmを測る。

出土旧石器時代遺物(第5~7図、図版14)

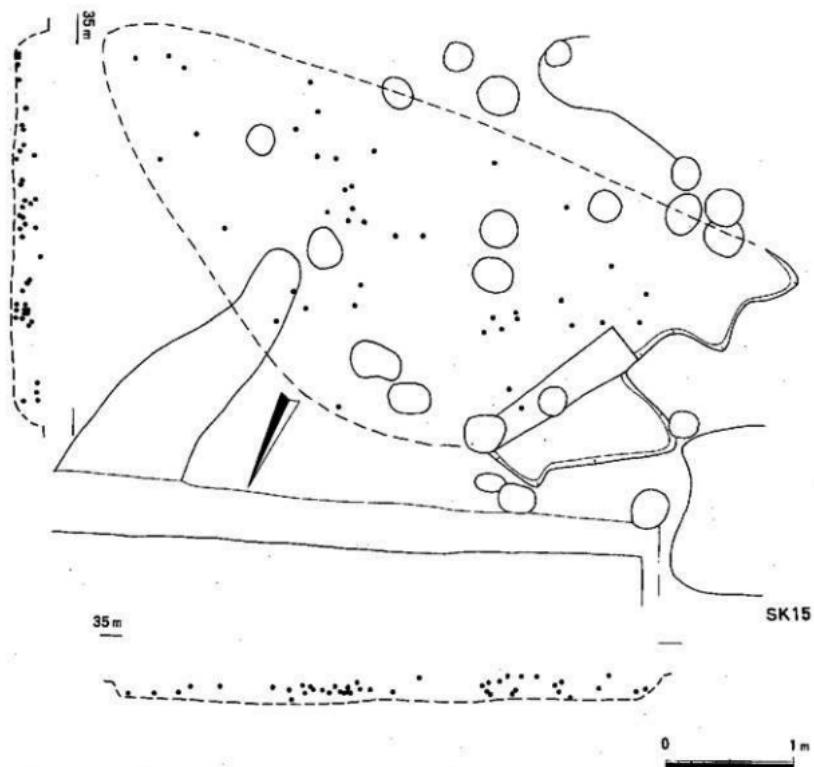
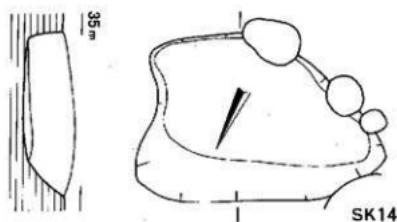
S K14とS K15及び他の時代の遺構等から出土した旧石器時代の出土遺物を一括して述べる。出土した石器は61点で、図示したのは32点である。その内訳はナイフ形石器3点、彫器1点、スクレーパー1点、微細剥離・二次調整を有する剥片19点、石核2点、石鏃1点である。石核と剥片の接合が1例確認できた。石器の概要を述べる。

ナイフ形石器(1~3)

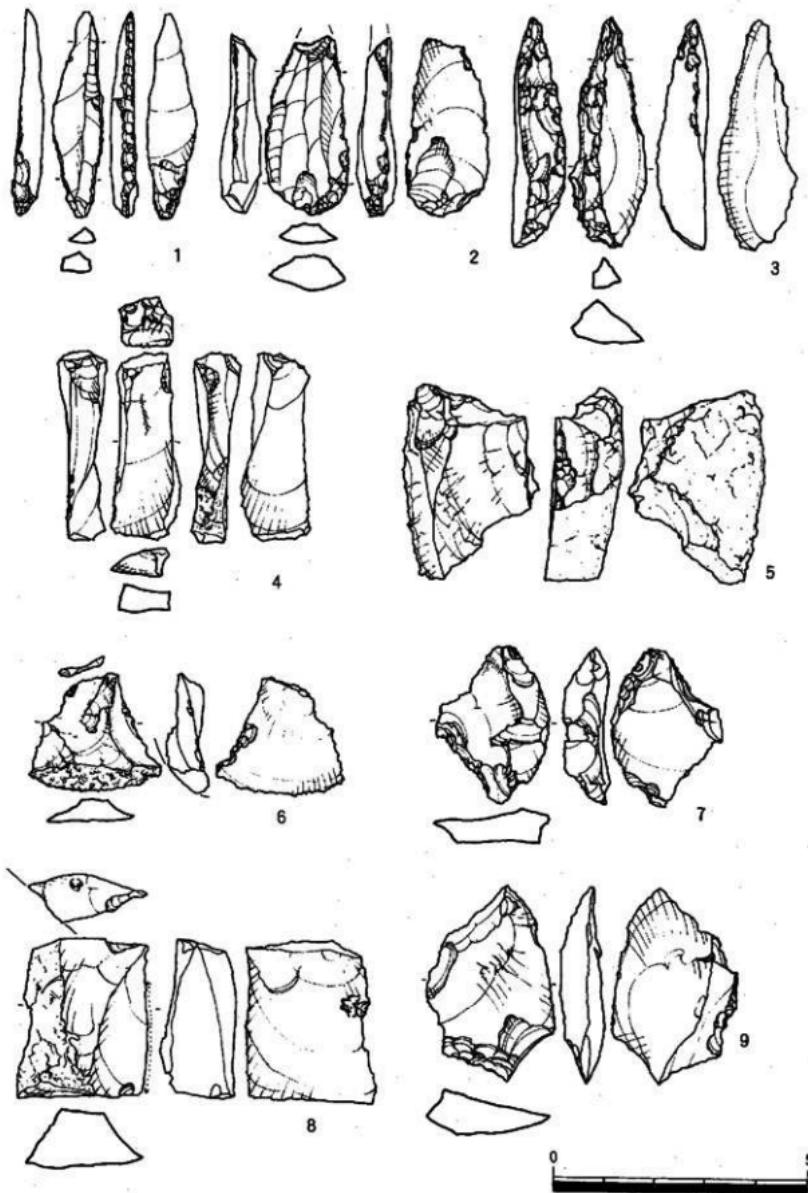
1は中央包含層出土。透明度の高い黒色黒曜石の縦長剥片を素材とするペン先形のものである。素材剥片の打面側を石器の先端とし、急角度の調整を施することで打面除去を行い、先端を尖らせている。基部腹面には平坦剥離を行い、素材剥片の厚みを減じる、先端は欠損しており、また刃部には微細剥離が観察される。2はS K15出土。黒色黒曜石の斜軸の剥片を素材とする。素材剥片の打角は60°前後で、打面をそのまま石器の基部とする。先端側左にはボジ面を残し、また基部右側縁に数回の調整を施す。微細剥離は左右両側縁に観察され、先端は欠損する。3は後世のピット出土。湾曲した横長剥片を素材とする。素材剥片の打面側に調整を施し、形状を整える。調整は背腹両面からなされ、石器の断面形は三角形となっている。右側縁は素材剥片の端部を残しており、微細剥離が観察される。微細剥離は先端側の方が著しい。青灰色黒曜石製。

彫器(4)

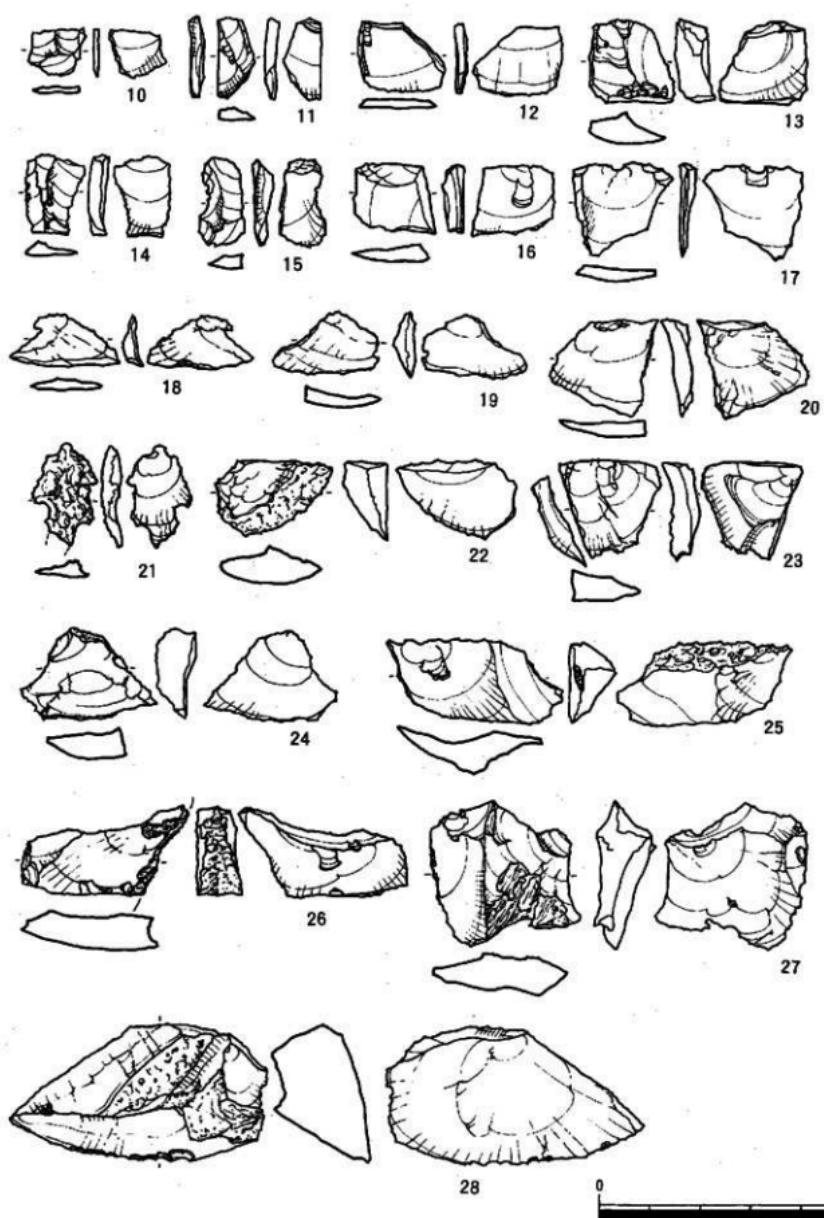
角柱状の縱長剥片を素材とし、左側縁に1回桶状剥離を行う。頭部は周縁より調整されている。微細剥離が左側縁に観察される。青灰色黒曜石製。S K15出土。



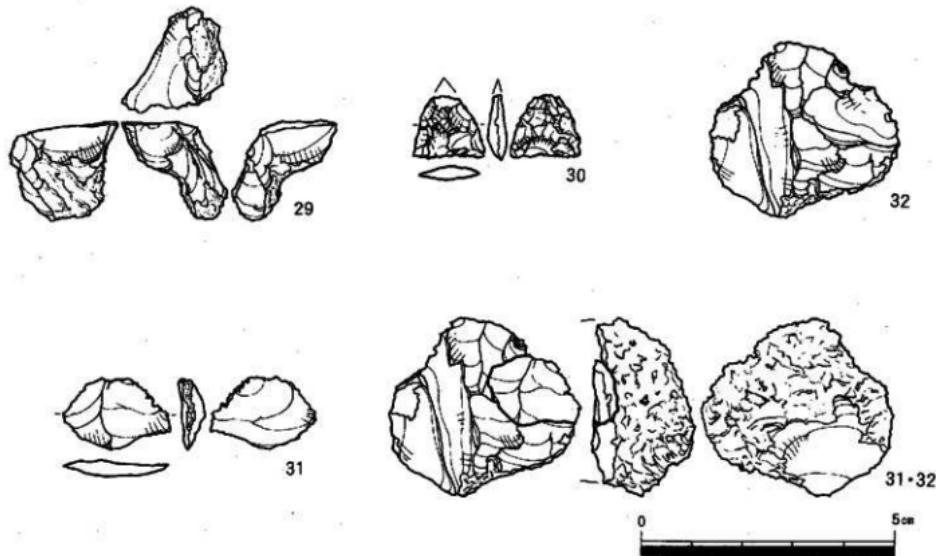
第4図 旧石器時代の不定形土坑



第5図 出土旧石器時代遺物 I



第6図 出土石器時代遺物 II



第7図 出土旧石器時代遺物Ⅲ

スクレーパー(5)

不定形剥片を剥離した石核をスクレーパーに転用したものである。淡黄褐色のチャート製で、背面には礫面が残る。刃部幅は2cmと短い。SK15出土。

微細剥離・二次調整を有する剥片(6~9・28)

6は下端部に礫面の残る剥片を素材とする。礫面の観察から原礫の形状は円礫であったとわかる。黒色黒曜石製。微細剥離は右側縁に観察される。7は不定形剥片を素材とする。調整は數カ所に観察され、左側縁上半は背面から、下半は腹面から、右側縁腹面側に数回施している。青灰色黒曜石製。8は厚みのある綫長剥片を素材とする。微細剥離は右側縁にのみ観察される。素材剥片の下端部は背面側からの加撃により欠損する。また打面にはパンチ痕と考えられるものが観察される。左側縁には大きく残る礫面の観察から、原礫の形状は角礫とわかる。黒色黒曜石製。9は不定形剥片を素材とするものである。素材剥片剥離後、素材剥片の打面に数回の調整を施し、また右側縁には平坦剥離を施す。素材剥片下端部は鋭い縁辺となっており、わずかに微細剥離が観察される。安山岩製。28は不定形剥片を素材とし、微細剥離は剥片下端部に観察される。安山岩製。いずれもSK15出土。

剥片(10~27・31)

剥片は53点出土した。長さは0.9cm~4.5cmを測る。黒色黒曜石製(6・8・11・12・14・21)、青灰色黒曜石製(10・13・15・23・25・31)、安山岩製(16・17・18・19・24・26・27)、チャート製(20・22)がある。また図示していないが玉髓ではないか考えられるものがSK14で出土している。

石核(29・32)

29は半坦打面から小右刃を剥離した石核である。打面に調整は施していない。剥離した剥片は最終剥離面の観察から幅1cm前後の小さなものであったと推察される。また礫面の残存する

割合が高いのに比べて剥片剥離を行った部分が少ないと考えられる。角礫の黒色黒曜石製。SK14の出土である。32は円礫を半裁したものから小形の不定形剥片を剥離した石核である。単一方向に剥片剥離を行う。剥片剥離の後、何らかの原因で石核の左半分は残存していない。風化のため石器表面は灰白色を呈するが、新しい割れ口の色調から長崎県亀岳産の黒曜石である可能性が高い。

石器(30)

基部に浅い抉りを入れたものである。先端は欠損している。安山岩製。SK15から出土したが、混入と考えられよう。

接合資料

剥片(31)と石核(32)の接合例である。剥片(31)剥離の後、少なくとも2回剥片剥離を行っている。この接合資料と同一母岩資料はほかに見られなかった。

| 番号 | 器種 | 最大長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 石材 | 備考 |
|----|-----------|------|------|------|------|------|-------|
| 1 | ナイフ形石器 | 40 | 9.2 | 4.5 | 1.6 | 黒OB | |
| 2 | ナイフ形石器 | 34.1 | 15.8 | 0.7 | 3.6 | 黒OB | |
| 3 | ナイフ形石器 | 44.7 | 14.1 | 8.1 | 4.3 | 青灰OC | |
| 4 | 彫器 | 36.2 | 12.8 | 9.5 | 4.4 | 青灰OC | |
| 5 | スクレーパー | 38.3 | 26.4 | 14.2 | 15.2 | チャート | |
| 6 | 剥片 | 22.8 | 25.2 | 5.1 | 2.5 | 黒OB | |
| 7 | 二次調整のある剥片 | 30.3 | 21.9 | 7.5 | 4.7 | 青灰OB | |
| 8 | 剥片 | 32.5 | 24.1 | 13 | 11.4 | 黒OB | |
| 9 | 二次調整のある剥片 | 24.1 | 38 | 7.4 | 6.5 | 安山岩 | |
| 10 | 剥片 | 9.4 | 1.2 | 1.4 | 0.1 | 青灰OB | |
| 11 | 剥片 | 15.4 | 6.9 | 2.3 | 0.3 | 黒OB | |
| 12 | 剥片 | 13.2 | 16.5 | 2.4 | 0.7 | 黒OB | |
| 13 | 剥片 | 15.9 | 17.2 | 5.8 | 1.5 | 青灰OB | |
| 14 | 剥片 | 16 | 11.4 | 2.9 | 0.6 | 黒OB | |
| 15 | 剥片 | 17.5 | 9.2 | 3.1 | 0.5 | 青灰OB | |
| 16 | 剥片 | 13.3 | 15.6 | 4.2 | 0.9 | 安山岩 | |
| 17 | 剥片 | 17.8 | 19.3 | 2.4 | 0.7 | 安山岩 | |
| 18 | 剥片 | 10.1 | 20.2 | 2.8 | 0.6 | 安山岩 | |
| 19 | 剥片 | 11.8 | 20.5 | 3.1 | 0.7 | 安山岩 | |
| 20 | 剥片 | 18.3 | 21.8 | 4.4 | 1.5 | チャート | |
| 21 | 剥片 | 19.9 | 11.9 | 3.5 | 0.6 | 黒OB | |
| 22 | 剥片 | 15.2 | 23.4 | 9.1 | 2.7 | チャート | |
| 23 | 剥片 | 18.8 | 19.7 | 5.9 | 1.9 | 青灰OB | |
| 24 | 剥片 | 17.8 | 26.5 | 6.1 | 2.1 | 安山岩 | |
| 25 | 剥片 | 15.4 | 33.4 | 9.4 | 2.6 | 青灰OB | |
| 26 | 剥片 | 17.1 | 32.5 | 0.8 | 4.7 | 安山岩 | |
| 27 | 剥片 | 25.8 | 27.9 | 0.9 | 6.6 | 安山岩 | |
| 28 | 使用痕を有する剥片 | 28.7 | 51.6 | 15.2 | 20.8 | 安山岩 | |
| 29 | 石核 | 16.9 | 20 | 17.3 | 3.9 | 黒OB | |
| 30 | 石核 | 11.7 | 13.4 | 3.1 | 0.6 | 安山岩 | |
| 31 | 剥片 | 13.4 | 20.6 | 4 | 1.0 | 青灰OB | 32と接合 |
| 32 | 石核 | 34.3 | 37.2 | 20.7 | 19.2 | 青灰OB | |

(2) その他の時代の遺構と遺物

① 不定形土坑

S K 11(第8図、図版2)

調査区東端で検出した大型の不定形土坑である。平面形も床面も出入りが激しく、一定の形状を成していない。調査区東側へと続くため、全形を把握していないが、これから東側は谷部へ向かうため、このまま谷に移行する可能性も考えられる。床面近くから湧水を伴うが、それほど激しいものではない。検出部分の最大長約8m、深さ約40cmを測る。覆土は黒褐色～灰色の粘質土である。この不定形土坑の西側はわずかの高さであるが、段落ちになっている。

出土遺物(第10図、図版3)

上坑内からは弥生時代～奈良時代の土器が小コンテナ1箱分出土した。33・34は弥生土器の底部である。33は小さなやや丸みを帯びた底で、壺の底部と考えられる。底部径3.7cmを測る。34は大きなやや上げ底で、甕の底部と思われる。底部径9.3cmを測る。調整はともにナデである。35は土師器の高坏片で、くびれ部の直径4.8cmを測る。器面の保持が悪く、調整はよくわからぬ。36・37は須恵器の坏身である。36は口縁部がやや長く、器壁が薄い。37は口縁部が短く、器壁が厚い。とともに古墳時代の坏身である。38～40は須恵器の坏蓋である。38は頂部につまみを有し、体部は丸みを帯びている。受け部はないと考えられる。39は受け部が付いている。38は推定口径約11.3cm、39は受部径12.6cmを測る。40はつまみを有し、体部はほぼ水平に移行している。41～43は須恵器の高台付坏の底部である。41・42は高台部から体部の立ち上がりまで若干の距離がある。41は高台が外傾し、端部が丸みを帯びている。42は高台が低く、断面形は台形を成している。43は高台からすぐに体部立ち上がりに移行している。高台は先端部が丸みを帯びている。高台径は41が8.3cm、42が9.5cm、43が8.9cmを測る。44は須恵器の壺の口縁部で口径11.2cmを測る。口縁部は歯ブラシ状に肥厚している。45は須恵器の壺、もしくは鉢の底部で、底径9.2cmを測る。底はやや上げ底である。46は土師器の壺の底部で底部径11.6cmを測る。やや上げ底で調整はロクロによるナデ調整である。47は須恵器の坏身の口縁部で、口縁端はやや外反している。48・49は土師器の皿である。ともに残りが悪いが、外底部にかすかに糸切り痕が残っている。48は口径6.9cm、底径9.7cm、器高1.6cmを測る。49は底径8.2cmを測る。50は滑石製石鏡で、四方に巻長の把手を有している。口縁部端の器厚2cm、口縁部径26.2cmを測る。51は平瓦で両面ともナデ調整で仕上げている。現状の長さ12.2cm、幅10.6cmを測る。

② 土坑

上坑状の遺構は007～013、016の番号を付したが、この内007～009は灰色に近いしまっていないう土で、出土遺物もほとんどなく、撓乱と考えられる。以下、これ以外の土坑について記述する。

S K 10(第8図、図版2)

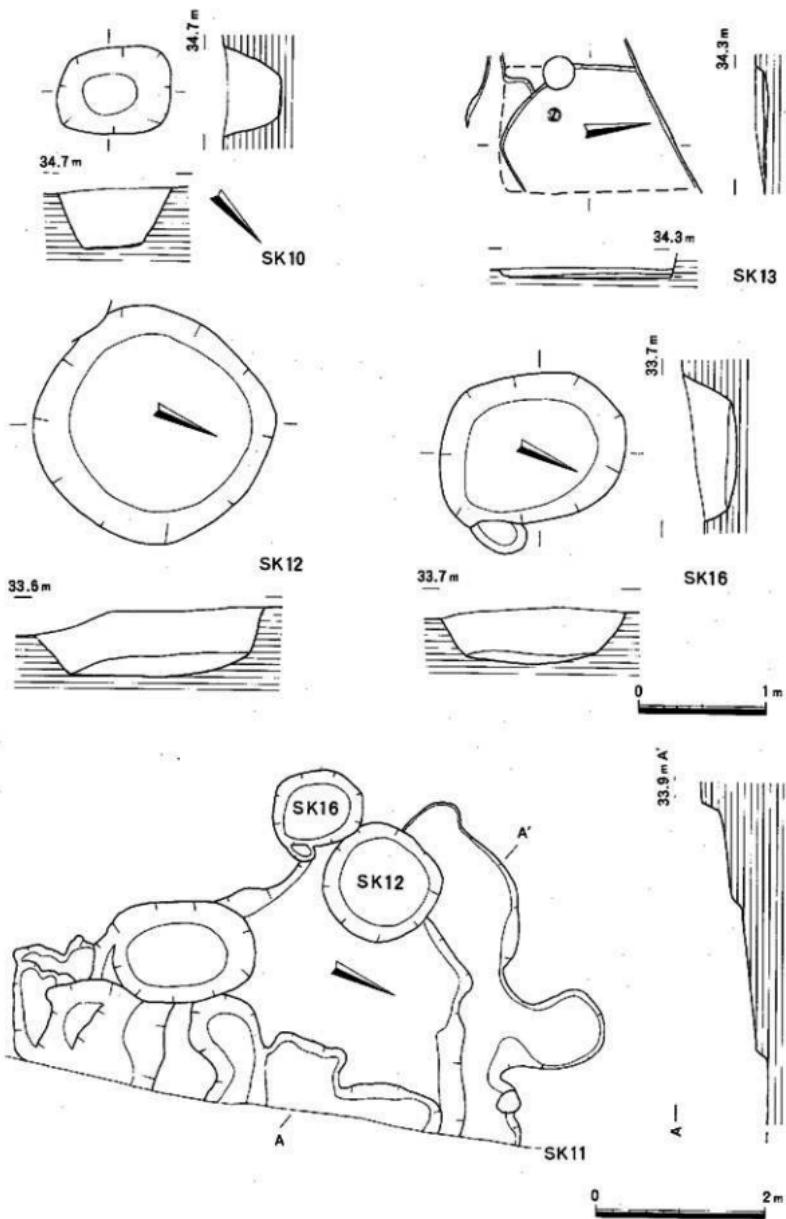
調査区中央付近南側で検出した。平面形は卵形に近く、断面形は逆台形を呈している。長さ0.9m、幅0.7m、深さ48cmを測る。覆土は褐色土でしまっている。新しい時期の可能性もある。

出土遺物

出土遺物はない。

S K 12(第8図、図版2)

S K 11西側の段落ち内で、S K 11の掘り下げ中に検出した。疊層を掘り込んでいる。平面形は方形に近い略円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。覆土は黒褐色土で、S K 11の覆土に近い。長さ0.9m、幅0.7m、深さ30cmを測る。



第8図 土坑及び不定形土坑

出土遺物

SK11掘り下げ過程で検出し、その大部分をSK11の一部として掘り下げたため、SK12として取り上げた遺物はないが、現場の所見ではほぼSK11の出土遺物と同様なものが出土している。

SK13(第8図、図版2)

調査区東側北壁沿いで検出した。極めて残りが悪く、もっとも深いところで深さ10cmしか遺存していない。部分的には壁がすでに壊されている部分もある。平面形は隅丸長方形を呈すると推定される。現状の長さ1.52m、幅1mを測る。覆土は黒褐色土である。土坑床面に土師器皿の完形が1点置かれていた。他に土師器皿片が8点出土しているが、完形の1点とあわせて5個体分があり、本来すべて完形であった可能性がある。そうするとこの遺構は墓で、土師器皿は副葬品であったかもしれない。

出土遺物(第10図、図版4)

55は床面に置かれていた土師器の皿である。口径8.9cm、底径7cm、高さ1.2cmを測る。外底部は糸切りである。56も土師器の皿で、底部径8.8cmを測る。外底部は糸切りである。推定高2cm、推定口径12.3cmを測る。ともに摩滅が著しい。

SK16(第8図、図版2)

SK12西側で検出した。平面形は楕円形に近く、断面形は逆台形を呈している。長さ1.47m、幅1.17m、深さ40cmを測る。覆土や全体のイメージはSK12に近い。

出土遺物(第10図、図版4)

9点出土した。52は土師器の高杯の脚部片である。内面はシボリの後ヘラケズリ、外面はロクロによるナデで仕上げている。53は須恵器の壺と思われる。底部近くの破片である。推定底部径は約13cmを測る。調整は全面ロクロによるナデである。

③溝

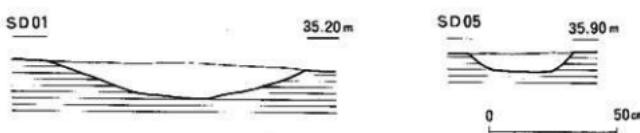
溝は01から06までの番号を付したが、02・03・04・06は近代以降の溝と考えられる。ただし溝の方向は時代に関係なく、ほぼ南北か東西方向を向いている。

SD01(第9図、図版2)

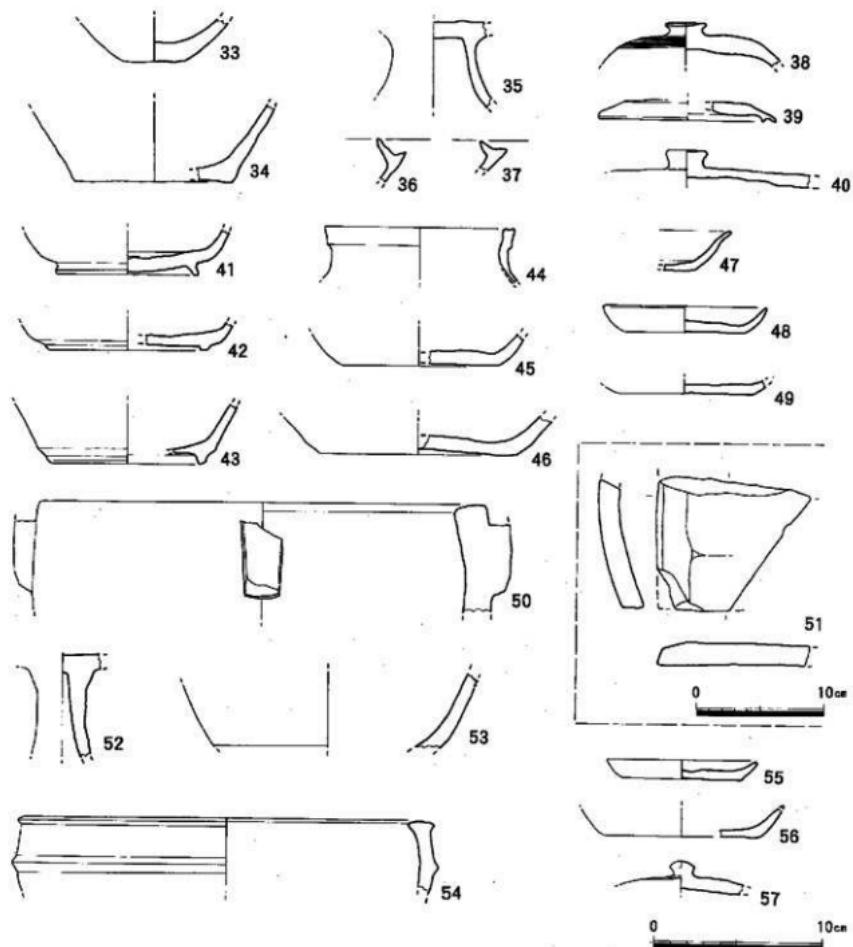
調査区中央北側で検出した。西端は搅乱により切られている。もっとも広い部分の幅1.07mを測るが、東端は先細りし、先端部は尖っている。また溝の西半は南壁立ち上がりが垂直に近い。断面形は主に逆台形に近い部分が多く、覆土は褐色を呈している。

出土遺物(第10図、図版4)

土師器・須恵質陶器・瓦など約100点、中ビニール袋1袋程度出土した。ほとんど小片である。57は須恵器の壺蓋で、頂部につまみを有している。器壁はやや厚い。54は陶器の壺で、口径23.7cmを測る。口縁部はやや内傾し、口縁直下に三角凸帯を1条巡らしている。両面とも無釉である。



第9図 溝の断面図



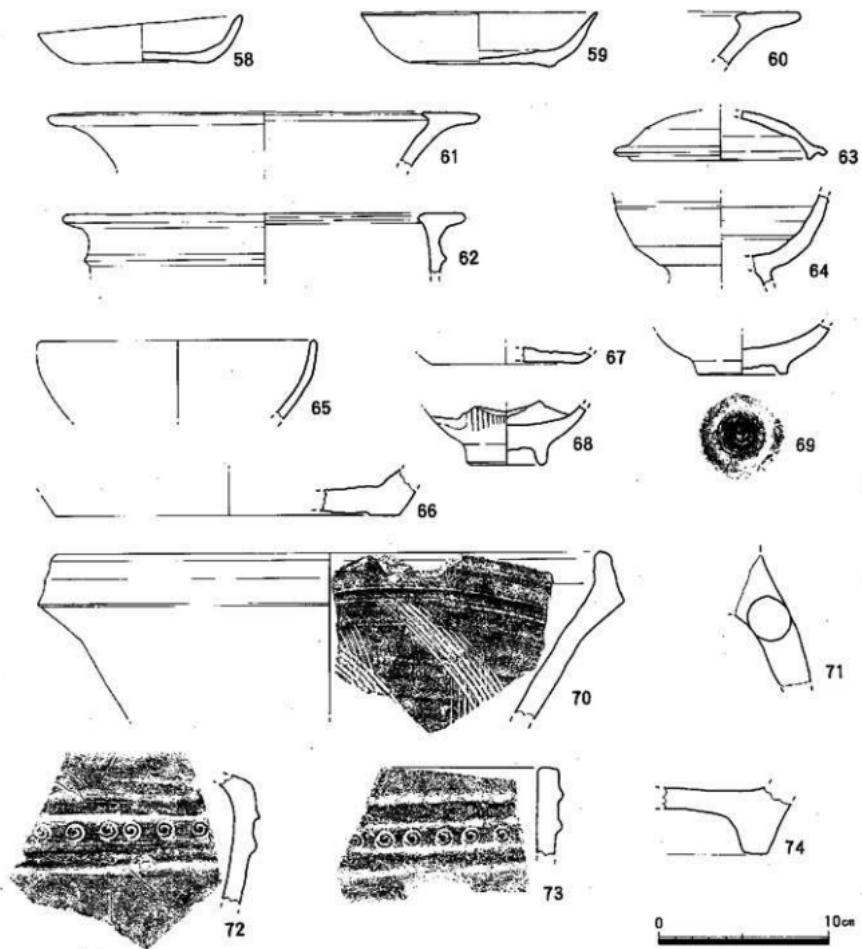
第10図 その他の時代の出土遺物 1

S D05(第9図、図版2)

S D01に平行して走る溝で、東半が幅40cmと狭く、西半が幅79cmと広くなっている。深さは14cmで、覆土は褐色である。

出土遺物

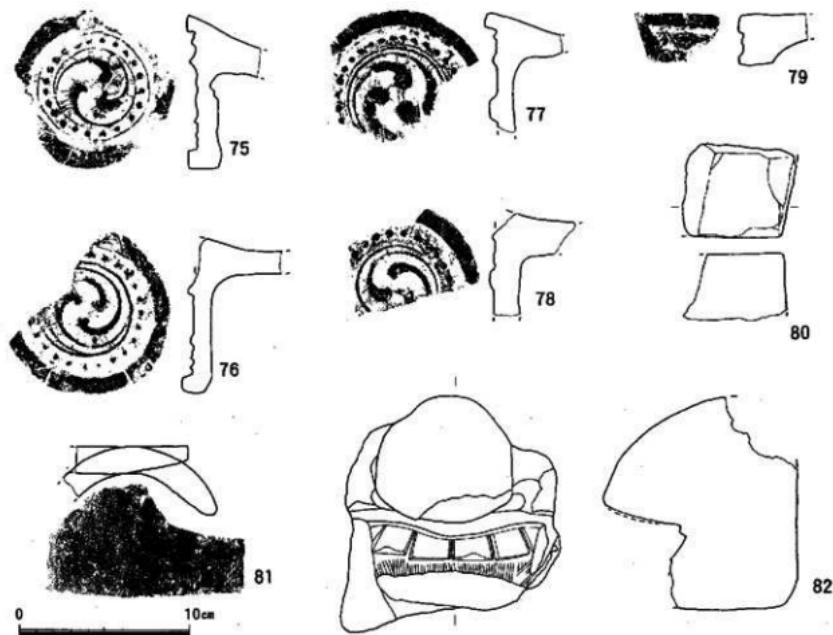
土師器・須恵質陶器・瓦など約70点、中ビニール袋1袋程度出土した。ほとんど小片である。同一個体の土鍋のまとまった破片が出土しているが、接合せず、実測可能な遺物はない。



第11図 その他の時代の出土遺物Ⅱ

④ ピット

ピットは前述のとおり、調査区中央の幅5mの南北方向部分を除いてほぼ全域に認められたが、特にその空白部分の両側に多い。これらのピットは径20cm前後のものが多く、柱痕跡が検出できたものは少なかったものの、直徑10cm前後の柱の一部が遺存しているピットが若干あり、ピットの多くが建物の柱穴と考えられる。そうすると、幅5mの空白部分は道路と考えられそうであるが、側溝は検出されなかつた。



第12図 その他の時代の出土遺物Ⅲ

出土遺物(第11図、図版4)

ピットから出土した遺物量は小コンテナ1箱で、そのほとんどが中世後半の土器・陶器・瓦である。58と59は土師器の皿で、ともに糸切り底である。58は口径12.0cm、器高2.6cm、底径8.7cmを測る。59は口径13.9cm、器高3.1cm、底径8.7cmを測る。

⑤ 中央包含層

S D 04(搅乱)周辺のみ厚さ5cmほどの黒褐色の包含層があった。出土遺物は総量で約100点、ビニール袋1袋である。弥生時代から奈良時代の土器の小片ばかりである。

出土遺物(第11図、図版4)

60は弥生土器で、壺の口縁部である。鋤先口縁で、全面ナデ調整を施している。両面とも橙色を呈している。

⑥ 表土出土遺物(第11・12図、図版4・5)

前述のとおり、耕作土中に、耕作の邪魔になったと考えられる遺物が穴の中にまとめて遺棄されており、機械で表土を剥いでいる最中に発見した。その中には弥生時代～近世までの土器・陶磁器・石器などが含まれている。特に中世後半の瓦が最も多かった。採集した遺物量は瓦がコンテナ4箱、その他の土器・陶磁器類が1箱である。このうち陶磁器類は少なく、青磁・白磁・李朝・褐釉など10数点で、多くは土師質・須恵質の土器である。

61と62は弥生土器で、61は壺の口縁部である。口径25.3cmを測る。口縁頂部平坦面の外側はわずかに凹む。橙色を呈し、ナデで仕上げている。62は壺の口縁部で、口径23.7cmを測る。口縁部下に断面三角形の凸帯を1条施す。調整は摩滅のためわからない。63と64は須恵器で、63は壺蓋で、受け部を有している。体部は丸みを帯びている。口径10.5cmを測る。64は高台付碗で、高台の推定径6.5cmを測る。器壁がかなり厚い。

65は縁軸陶器の碗である。破片が小さく、口径は推定に近いが17cmを測る。釉は落剥がひどく、一部しか残っていない。胎土は白色に近く微細な砂粒を含んでいる。釉は薄い灰緑色を呈している。66は滑石製石鍋の底部片で、底径20.2cmを測る。外底部の作りはやや雑である。67は須恵器の壺の底部で、底径8.7cmを測る。68は緑色の釉を施した青磁で底径4.7cmを測る。外面にはかすかに蓮弁が確認できる。内面にも文様があるが、内容はわからない。69は李朝青磁の碗で、緑灰色の釉を施す。外底部には渦巻き状のケズリを施し、目跡が4ヶ所残っている。

70は備前の中鉢である。両面とも赤色を呈している。口径32.2cmを測る。条線は7本である。最初に縱方向に条線を引き、その後、同じ部分に斜方向に引いている。71は土鍋の足で、足の径2.4cmを測る。72~74は火舎で、72は口縁端部が内湾し、73は直行する。とともに2本の凸帯の間に右回りの渦巻きのスタンプを押しているが、渦巻きのはじまり位置が異なっている。74は底部片である。断面図に見えるのは幅1.7cm、高さ2.6cmの足で、4脚であろう。

75~78は軒丸瓦である。いずれも中央に左回りの三巴を施し、その周囲に團線2本と22~30個前後の珠文を施している。巴の太さや珠文の数は異なっている。75と76は焼しが施されている。また76の内面にはわずかに布目痕跡がある。瓦当の径は11.9cm~12.6cmを測る。79は軒半瓦で、瓦当の文様は明瞭ではない。全面灰白色を呈している。80は磚かと思われる。わずかに布目痕が認められる。現存部分の厚さ5cmを測る。81は丸瓦で、焼しがかかっている。外面はヘラケズリで、内面には布目痕が残っている。82は鬼瓦の鼻から口にかけての破片である。齒は6本と思われる。図上では表現していないが、鼻の両穴は貫通している。頸部分は生きており、下歯の表現はない。鼻の幅8.1cm、鼻部分の全厚11.5cmを測る。焼しがかかっている。

2-4まとめ

検出した遺構・遺物のうち主な時期は、旧石器時代のナイフ形石器文化と中世後半のもので、その他古墳時代後期の薄い包含層、古代の湧水を伴う大型の土坑、中世中頃の土坑など、各期の遺構・遺物が発見された。以下、旧石器時代と中世後半期の遺構と遺物について述べる。

ナイフ形石器期の遺構は不定形土坑2基であるが、2基の形態はまったく異なる。SK14は部分的にオーバーハングするところがあり、また床面が若干凸凹しているなど、いわゆる風倒木状遺構の可能性が考えられるが、SK15は浅く広いことから、遺構というよりは当時の地形形状の凹みかもしれない。ともに土坑内の覆土は地山に極めて近い色で、検出は容易ではない。有田遺跡では、斜面上の地点で旧石器時代の遺物がよく出土しており、今回も同様な状況である。これは台地頂部がすでに削平されているのに対し、斜面上では削平を免れ、包含層が遺存していたり、今回のように遺構が遺存していると考えられる。今後、特に台地の斜面上については注意しなければならない。

出土した石器はSK14・15と他時期の遺構から出土しているが、他時期のものはSK15を切るピットから出土しており、出土場所からSK15に伴うものと考えて大過ないであろう。

(米倉)

出土した石器群は不定形土坑からの一括出土遺物でありながらも、石鐵が見られるなど旧石器時代遺物と縄文時代遺物の混在が考えられる。二者の分離は特定器種からのみ可能であり、以下旧石器・縄文時代の順に考察を行う。

旧石器時代のものとしてナイフ形石器・彫器がある。これらの素材は縦長剥片・横長剥片・斜軸の剥片であり、多様な剥片剥離技術が混在した状況である。これらの時間的前後関係は不明であるが、各ナイフ形石器の形態を観察すると、これらはナイフ形石器文化の中でも終わりに近い時期に位置づけられる可能性が高い。

縄文時代のものとして明確なのは石鐵のみである。石鐵は基部に抉りを入れ、また小形であるという平面的特徴から、縄文時代草創期のものである可能性が高い。
(藤木)

縄文時代草創期と考えられる石鐵は大原D遺跡を始め、北部九州での類例が増えているもので、草創期後半期～末期に属するものである。今回は遺構は検出できなかったものの、近隣に同期の遺構・遺物が考えられ、今後の調査に期待したい。

中世後半の遺構は溝と土坑・ピットである。時期の分かる遺物が出土したピットはそのほとんどが中世後半であることから、検出したピットの多くが当該期であると考えて大過ないであろう。調査区全体を見渡すと、ピットの極端に少ない地点が3ヶ所ある。調査区西端は削平によるもので、東端は前述のように段落ち下で、谷部近くのためと考えられる。

一方調査区中央付近で、南北の軸からわずかに東にふれた幅約5mの範囲にはほとんどピットがなく、道路の可能性が高いと考えられる。ピット群は建物として復元することはできなかつたものの、柱痕跡のあるものや、わずかではあるが、柱そのものが出土したピットがあることから、建物が存在したことは間違いない、道路とその両側の建物群という捉え方が可能である。大量に出土した瓦の存在はそれを傍証している。この時期でも、他の遺跡例では、一般集落に瓦が葺かれることは多くはない、何らかの重要建築物が近くに建てられた可能性が高いと考えられる。この道路状の空白地の延長上の北側は4次調査が行われている。そこでは中世後半期の瓦群とともに池状の遺構が検出されており、さらにその北には独立した小山状の丘がある。すなわち、池状の遺構を持つ何らかの建物群へ通ずる道路と考えることもできる。

時期的には、明確な共伴遺物がないため明確ではないが、ピット内の小片や表土から出土した遺物のうち多くが15～16世紀前半頃のもので、概略この時期に属していると考えられよう。当地は野芥荘に属していると考えられる。野芥荘は和名抄の能解郷から名を引き継ぎ、平安時代末から続く荘園で、当初、鳥羽天皇第3皇女の所領であった。16世紀初頭には野芥荘は櫛田宮領に属し、また大永6(1521)年の文書には、野芥大聖寺という名が見える。今回の瓦群がこの寺に関連する施設のものかどうか現時点では明らかではないが、4次調査とあわせて、中世末の早良平野南半の状況の解明に一資料を提供したと言えよう。
(米倉)

3 野芥遺跡群第8次調査

3-1 調査に至る経緯と調査組織

平成8年6月25日、永島常弘氏より福岡市早良区野芥2丁目地内における開発事前審査願いが提出され、周知の野芥遺跡内に含まれるため、同年7月3日試掘を行った。その結果、古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出されたため、本調査を実施することとなった。

本調査は、平成8年8月1日から同年9月7日まで実施した。調査前は、試掘の結果により、住居址を想定していたが、表土を除去した結果、大溝2本等を検出し、調査期間の不足が懸念されたが、原因者との契約最終日に何とか調査を終了することができた。

調査組織

調査委託 永島常弘

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

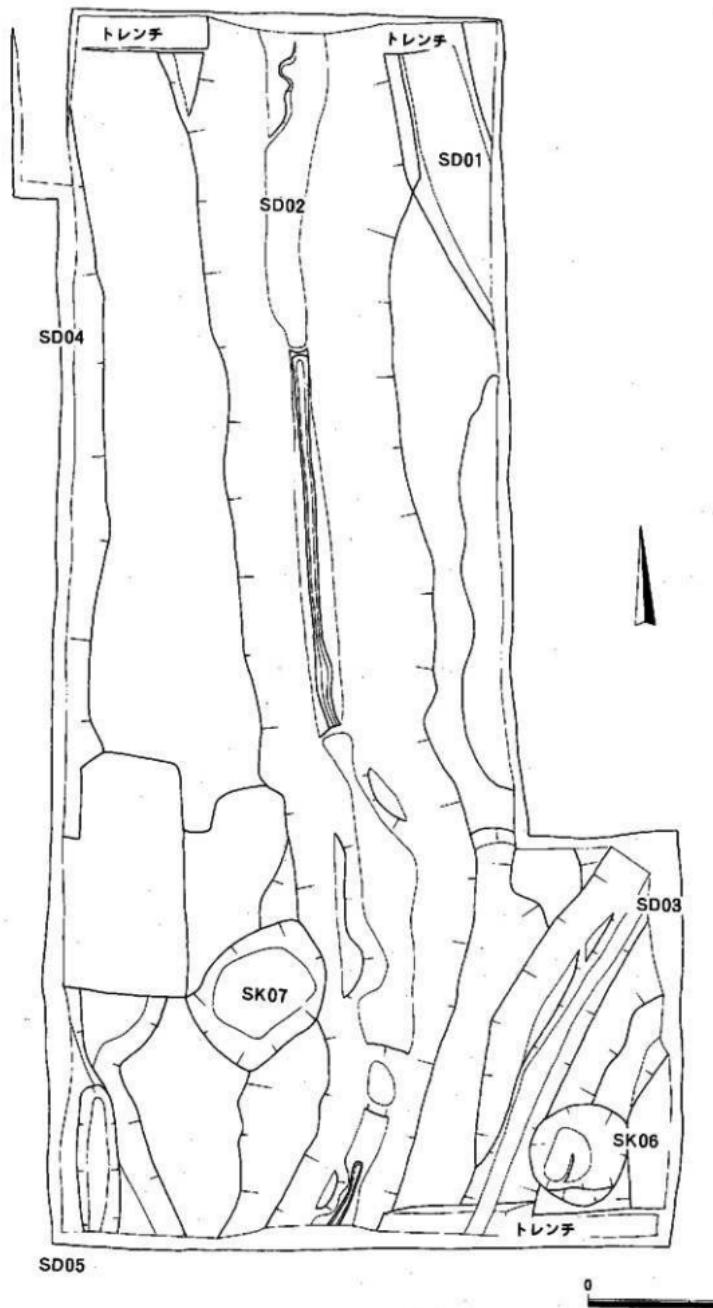
| | |
|---------|----------------|
| 埋蔵文化財課長 | 荒巻 雄勝 |
| 第1係長 | 横山 邦継(前任) 二宮忠司 |
| 調査担当 | 米倉 秀紀 |
| 庶務担当 | 西田 結香(前任) 河野淳美 |

調査協力

青柳美智子 海津宏子 金子由利子 清原ユリ子 佐藤テル子 柴田常人 永井ゆり子
西尾タツヨ 土生喜代子 土生ヨシ子 堀川ヒロ子 松井フユ子 門司弘子 大穂栄子
大穂アサ子 保野志津代 永末京子 東島直美 上野道郎 長谷川律子 井釜庸子
池健助 牧之口豊子 蜂須賀博子 竹田弘子 萩本恵子 柴田加津子



第13図 第8次調査位置図



第14図 第8次調査造構配置図

3-2 調査地点の位置と調査の概要

当調査地点は台地北側の沖積地部分に立地する。調査地西側には小川が流れ、東側100mに油山川、西側500mには金屑川が流れている。現在の標高約19mを測る。遺構の検出面は上混じりの砂を基本としているが、河川堆積物のため、場所により、色も構成物も異なっている。そのため、遺構の検出は困難を極め、遺構検出時には溝が4本あるのは確認できたものの、他の遺構や溝と溝の切り合いはよくわからなかった。そのため、調査区の中央を南北に走るSD02を中心に調査区北端と南端にトレンチを入れる作業から調査を開始した。

トレンチを入れた結果、溝は複雑に土が堆積しており、数度の掘り直しがあることを確認したが、各流れごとに掘り下げるには土層の判別が難しいことと、時間的制約から困難なので溝の掘りさげにあたっては以下のようにした。SD02については全体を4分割、SD03については2分割し、1区・2区・・・と名を付し、またそれぞれ上から下へ掘り下げるたびに1層・2層・3層・・・と名を付したが、もちろん純粋な層位を表わしてはいない。またSD02とSD03は調査区南端部で切りあっているが、結果的には土層図(第15図)のとおり、同時併存と考えられるのだが、その切り合いは調査区最終近くまでわからず、一部掘り間違った。

検出した遺構は古墳時代中頃の溝2条と上坑2基、時期不明の溝2条、中世の溝1条である。ただし古墳時代の土坑は溝の掘り下げ中に検出し、中世の溝はSD04と切り合っており、当初この溝の存在に気付かなかつたため、遺物の多くはSD04で取り上げている。

調査の最後に地山層を掘り下げたが、遺物は1点も出土しなかった。

なお、後述のとおり、SD02とSD03からは大量の遺物が出土した。そのすべてを本報告書で紹介することはページ数の都合で不可能であるが、できるだけ遺物実測図を多くのせることを心掛けたため、遺物の説明文章は極力省いた。なお出土土器の内、「須恵器」等の記述がないものはすべて上部器である。また溝からは弥生時代の土器や石庖丁・石鎌、曾畠式土器が出土したが、遺構と関係のない遺物は掲載しなかった。

3-3 遺構と遺物

① 溝

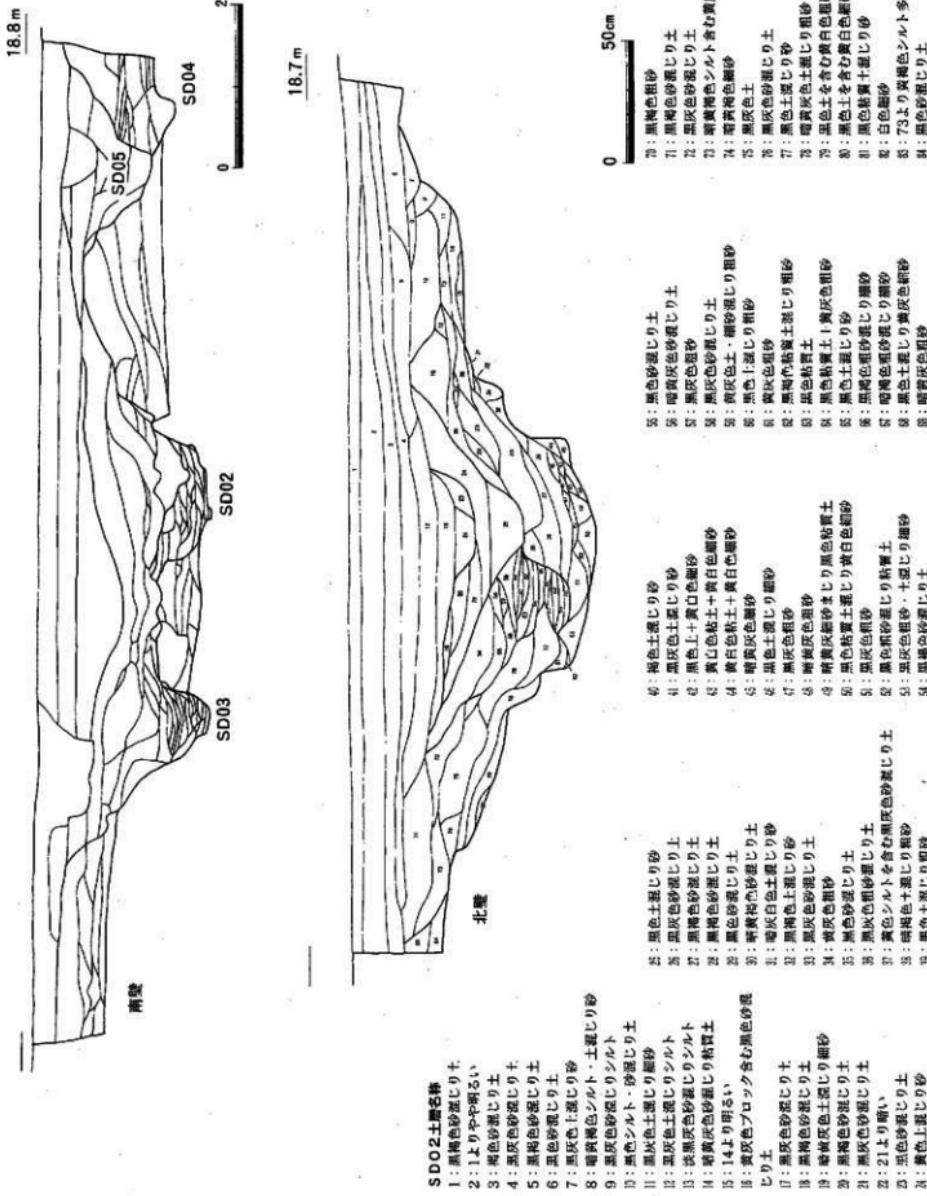
SD01(第14図、図版9)

調査区北西隅で検出した。幅1.70m、深さ21cmを測る。断面形は逆台形を呈している。覆土は黒褐色の砂質土を主体とする。出土遺物はなく、時期はまったくわからない。

SD02(第14~16図、図版6~9)

調査区中央を南北に走る、幅約3.5m、深さ約1.5mの溝である。この溝とSD03とは少なくとも一時期は同時併存と考えられ、南から流れてきた水をこの地点で北と東に分配している。SD02とSD03は鋭角に周囲と高さを変えずにいたが、調査時に掘りすぎた。調査区北壁の上層断面を見ると、度重なる掘り直しが確認できる。これが人工的な掘り直しか、たんなる洪水等による流路の変更なのか判然としない。

北側土層断面を見ると、まず当時の溝は断面形は2段の箱形を呈している。その後大きなものだけを見ても4度以上の掘り直しが確認できる。特に溝の中程から下には、薄い砂の互層の堆積した流路が2つ確認できる。また最後の掘り直しと言ってもいい溝上部の浅く広い流路の底面には、鉄分の集積が認められる。この鉄分の集積する流路はSD02とSD03の両者とも見ることができ、南側土層断面部分では両者が一つの溝として集約されており、この時期には調査地区内で、両者の溝に水を分岐していたと考えられる。おそらく、溝の向きや時代的なことを考え



第15図 調査区北壁SD02及び調査区南壁土層断面図

れば、開墾当初から調査区南側で分岐していたと考える方が至当であろう。

一方、調査区南壁の十層断面を見ると、SD02は北側断面に比べ全体的に小振りになっている。ほぼ溝内の層は砂層で、北側の薄い砂の互層がどれに対応するか一見明確ではないが、北側断面の鉄分集積層に対応する層が南側断面でも見られ、その深さ等から考えれば、南側断面の中程の深さのやや深い層群が対応するものと思われる。

1区から3区北半にかけ少なくとも2層の土器の集中（土器群）が確認された。上層は、2層目の2区の東半で検出した（上層土器群）。下の遺物の集中は、1区から3区北半にかけほぼ全域の中央付近、上層土器群の1～2層下で出土した（中層土器群）。中層遺物はさらにいくつかの集中部分に分けられ、それぞれ番号を付して取り上げた。ただしレベル的には上層・中層のいずれの群も北側土層の鉄分集積より上部から出土しているものがほとんどである。しかも鉄分集積層の流路の上部付近で出土したものが多かった。溝の下層からは遺物の出土は少なく、出土した遺物も破片が多かった。また、溝の底まで掘り下げても澁水は極めて少なかった。

出土遺物(第17～25図、図版10～20)

SD02からは小コンテナ換算で約100箱の遺物が出土した。そのほとんどは上層土器群及び中層土器群からの出土である。上層土器群はさらにA群・B群・C群に、中層土器群はD群に分けられる。ただし前述のようにこれらの土器群のすべてが鉄分集積層のある流路に伴うと考えられる。またこれらの群とは別に単体で取り上げた上器もある。さらに上器群とは別に地区毎に一括で取り上げた遺物の中にも完形で取り上げた土器が少なからず存在する。以下、十器群別に記述する。

A群土器群出土遺物(第17図)

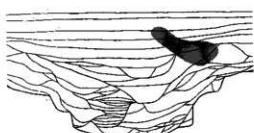
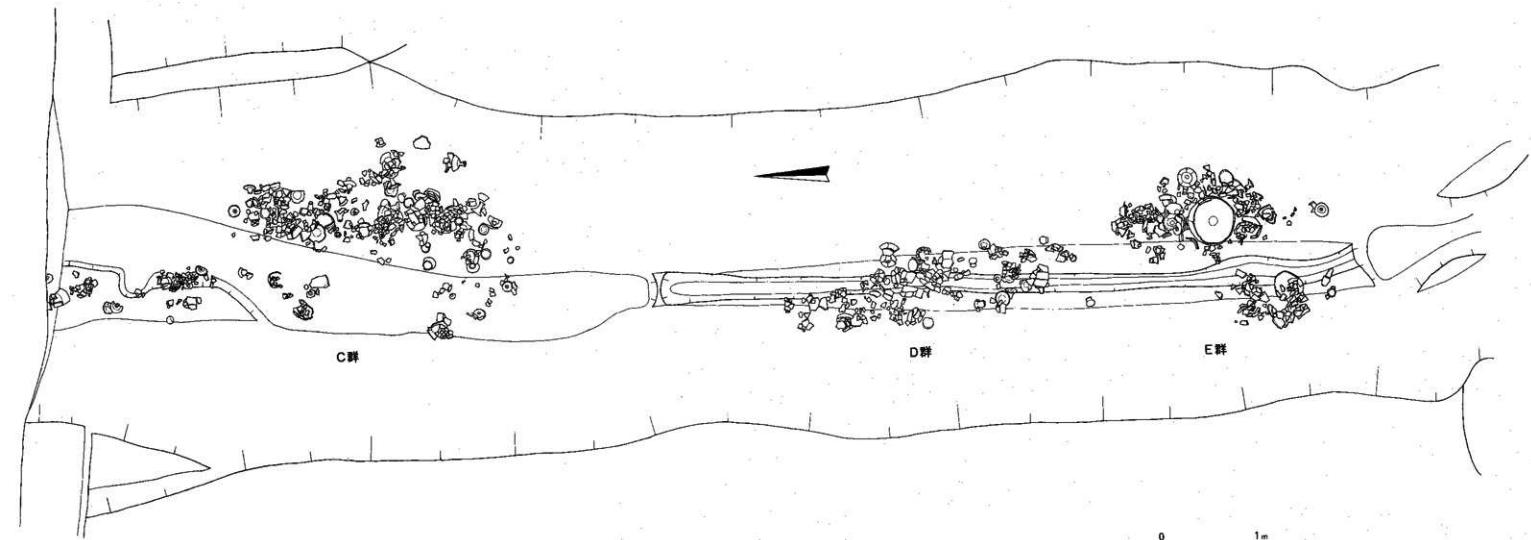
1区の上層で、溝東側の肩付近で検出した土器群である。検出範囲は長さ3.5m、幅1.2mを測る。土師器壺、中・大壺・小形丸底壺、高壺、甑、ミニチュアの碗・高壺及び須恵器高壺が出土した。

1は中形の甕である。外反する口縁部をもつ。2も甕で、直線的に外傾する口縁部をもつ。3は付着していないものの、器面の荒れがひどく、火を受けているものと判断できる。3～5はいわゆる小形丸底壺で、5には胴最大部のすぐ上に穿孔が施されている。6はほぼ完形の甕で、器高42cmを測る。底は中央に橋状部分を造り出すタイプである。本来赤色を呈しているが、剥げて淡黄色を呈している。下部に大きな黒斑がある。7～16は高壺である。脚部は、脚の立ち上がりが比較的垂直に近く、脚中央外側がやや膨れる器形を呈している。その中でも、膨らみの強いもの(7・9)、裾部と脚上部の稜が明瞭なもの(7・13)など、個体による差が認められる。調整も各個体による差が激しい。13・14・16には凹形透かしがある。壺部は壺上部と下部の境に明瞭な稜をもつもの(10・12・16)と上部から下部の境に段を有しながらも全体として丸みを帯びているもの(11)に分けられる。18～20はミニチュア土器である。いずれも手づくりで、18・19は鉢、20は高壺である。17は須恵器の高壺で壺の受け部を欠失している。脚部の透かしは長台形で三ヶ所ある。

B群土器群出土遺物(第18図)

B群出土土器は、2区の上層・溝の西側肩直下で検出した。出土遺物は少なく、全量でコンテナ1箱で、中壺片1点、小形壺2点、高壺2点、小鉢2点である。

21は口縁部が直立する壺で、口縁端部は内寄し先細りしている。22・23は小形丸底壺で、22は口径が胴部最大径より大きく、23はほぼ同じである。23は胴最大部に稜が走っている。24・25は高壺で、壺部の下部は水平に近く、外面に2種類のハケを施している。全体にていねいに作っている。25の脚部はかなり器壁が厚く、内面は丸みを帯びている。26・27は浅い鉢で26は半球状の器形で、外面にヘラナデを施している。27は底部が上げ底で、内面口縁直下に、接合部の



A群出土層位



B群出土層位



C群出土層位

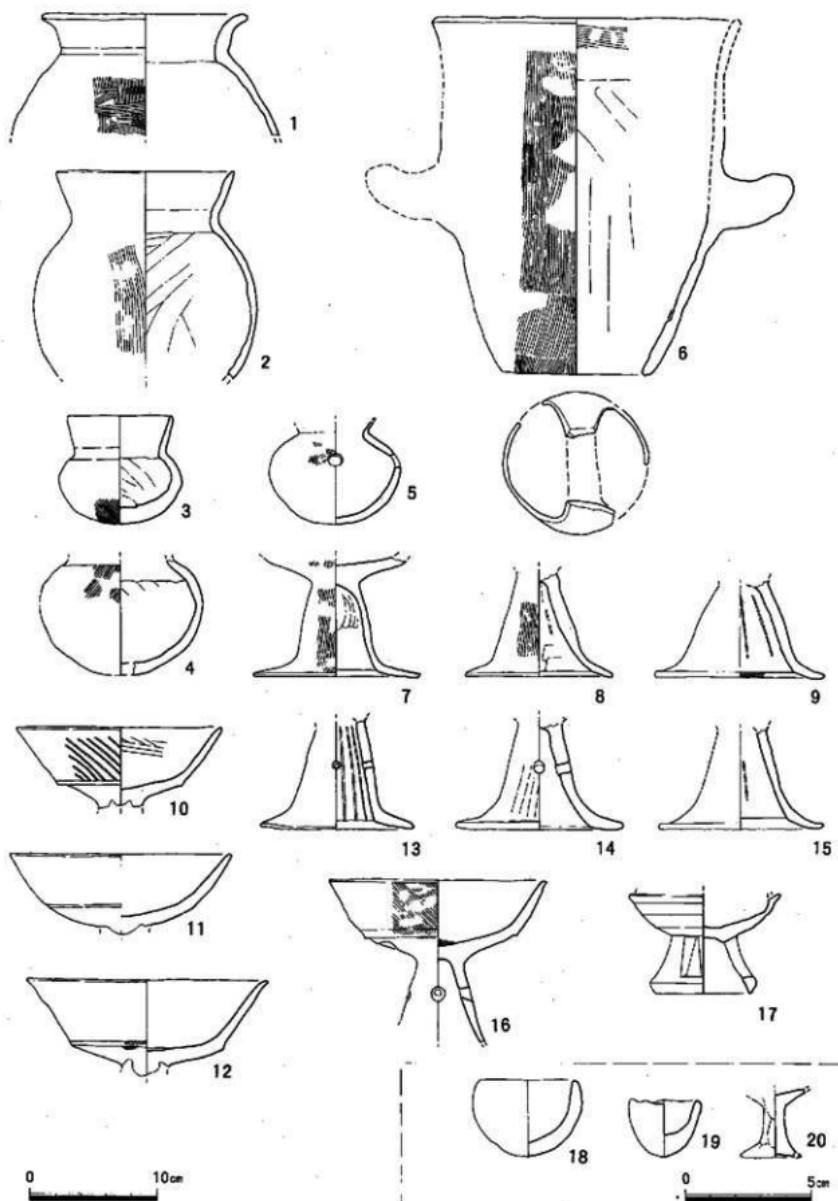


D群出土層位

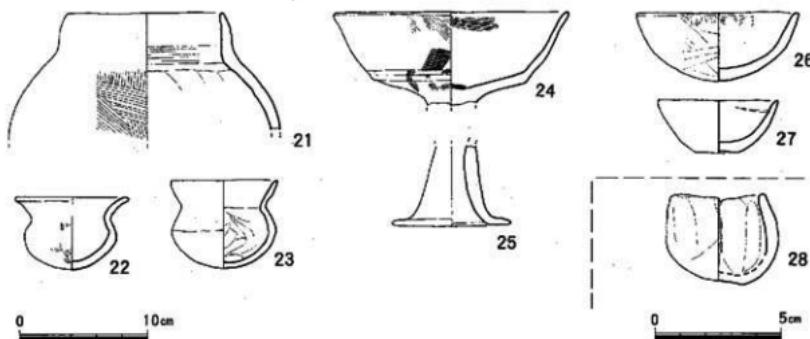


E群出土層位

第16図 SD02遺物出土状況



第17図 SD02A群土器群出土遺物



第18図 SD02B群土器群出土遺物

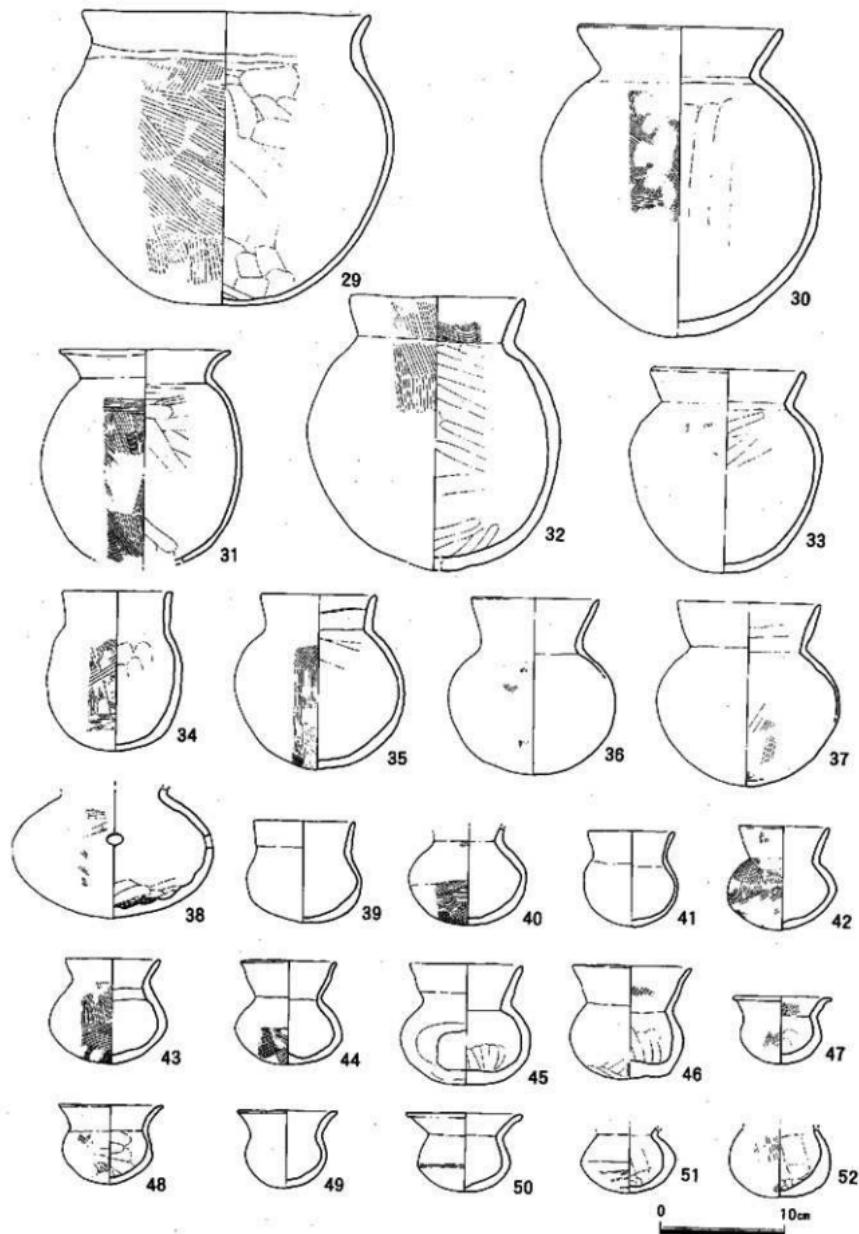
跡が沈線状に残っている。28はミニチュア土器である。手づくねの浅鉢形で、両面とも縦方向のケズリぎみナデである。

C群土器群出土遺物(第19・20図)

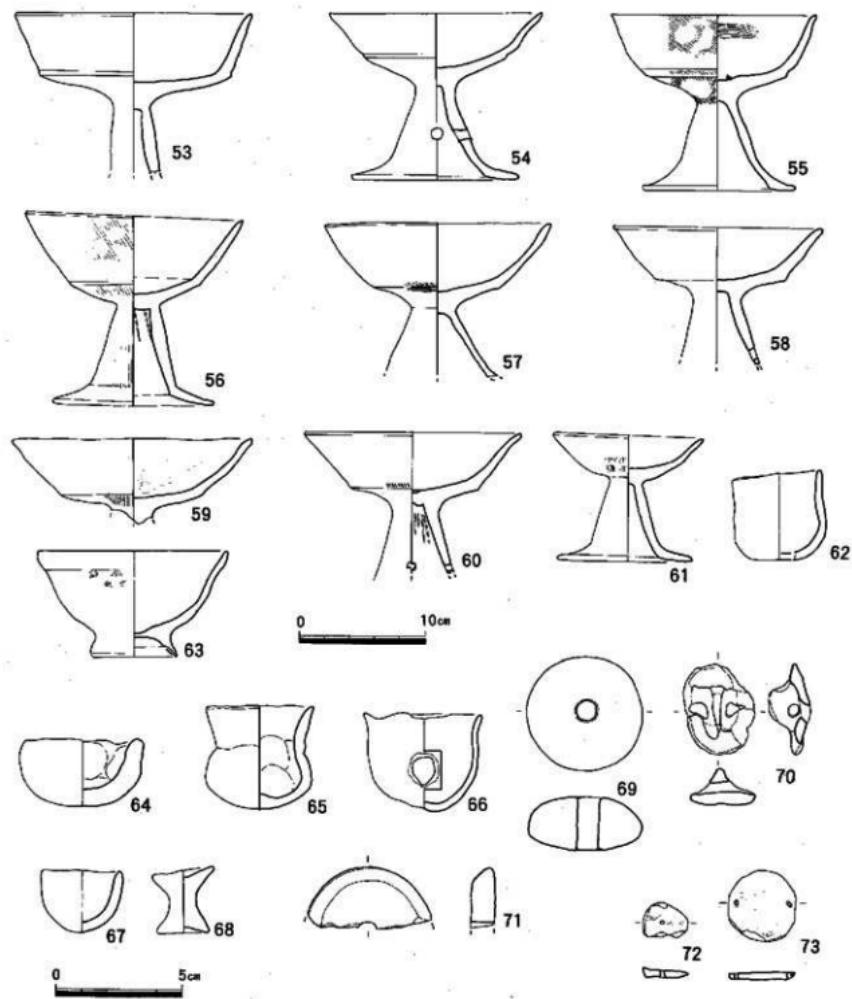
C群は1区でかなり広い範囲に渡って出土した。北半は小さな2小群があり、その南側の東壁近くに大きなまとまりがある。このまとまりもさらに細かく分けられるかも知れない。溝の中程の深さから出土したが、出土レベルを北側土層断面に照らし合わせると、鉄分の集積がある溝の底に這うように出土している。高坏の倒れ方を見ると、一定の方向に倒れておらず、他の土器の割れ方を見てもその場で割れているものが多く、ほぼ検出場所に置かれていたものと考えられる。詳細な器種別数量は出せ得なかつたが、高坏の数がかなり多い。

29～33は堀と呼んでよきそうな一群である。29は広口で、胴最大部直下にススラしきものが付着している。30は球形をした胴部と直線的な口縁部を持ち、外面に赤い化粧土らしきものが見られる。煮炊きに供した形跡はない。31は小形の甕で、径14cmほどの大きな黒斑がある。内面はごく一部にハケメがあり、ハケの後にケズリを施している。煮炊きに供した形跡はない。32は器壁の厚い土器で、器表面は2次焼成で剥落が多い。スカーフが胴最大部を中心に付着している。33は器表面の半分以上を黒斑が占めている。2次焼成の痕跡は見られない。

34～52はいわゆる小型丸底甕といわれる一群である。34～37はその内やや大きなもので、やせぎみの34と球形胴部の35～37がある。また36・37は器壁が薄く作りが丁寧である。38もやや大き目のものであるが、胴部が開き、中央に焼成後の穿孔が施されている。39～52は小形のもので、口縁部の形態を見ると、直立気味のもの(39・40)、口径が胴部最大径に近いもの(41～45)、胴部最大径より口径が大きく、開いているもの(46～50)に分けられる。また、47や50などは全体的に作りがていねいであるが、46は形が歪み、器壁も厚く、雑な仕上げである。45は焼成後に大きな穴があいている。全体的に、調整は外面がハケもししくはナデ、内面は口縁部がハケ後ナデ、胴部はヘラケズリである。46の底部外面はヘラケズリである。40と42・44は外面の胴最大部でハケの方向が変わっており、その境に稜線がはいる。粘土の接合部と考えられる。

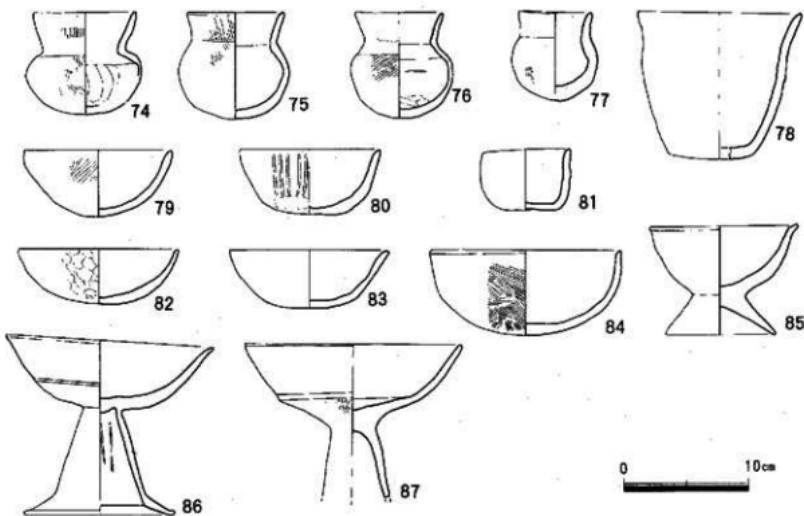


第19図 SD02C群土器群出土遺物1



第20図 SD02C群土器群出土遺物2

53～61は高坏で、外傾する口縁部から稜をもって坏下半部へ移行し、開き気味の脚部をもつものがほとんどであるが、口縁部全体が外反するもの(54・60)、内斂するもの(55・57)、坏部の稜より上が短いもの(54)など細かい点で異なっている。他に口縁部が直立気味で、脚部が垂直に近いもの(53)、高坏部が丸みを帯びて稜がなく、全体的に小振りなもの(61)がある。孔は54が2穴、58が3穴、60が1もしくは2穴である。調整はハケもしくはナデであるが、59の内面には板(?)状調整具を一回転させた後、ななめ上に引き上げた痕跡が残っている。62はコップ形の鉢である。全面ナデ調整で仕上げている。63は台付鉢で、台部分は高さ1.6cmと低い。



第21図 SD02D群土器群出土遺物

64~68はミニチュア土器で、65は壺、64・66・67は鉢、68は高环である。壺はほぼ実用品に近い形を呈しているが、高环は坏部をかなり省略している。66には胴部に焼成後の穿孔が施されている。69は土製紡錘車で直径4.6cm、厚さ2.1cmを測る。70は土製模造鏡で、つまみ上げた鋏部に穿孔を施して、鋏孔を作っている。鏡面にあたる部分は歪みが激しい。長さ3.5cm、現存幅2.8cmを測る。71は石製紡錘車で、径約5.2cmを測る。72・73は滑石製有孔石製品で、72は中央に1穴を開け、径約1.8cmを測る。73は両端に2穴を開け、径約2.8cmを測る。

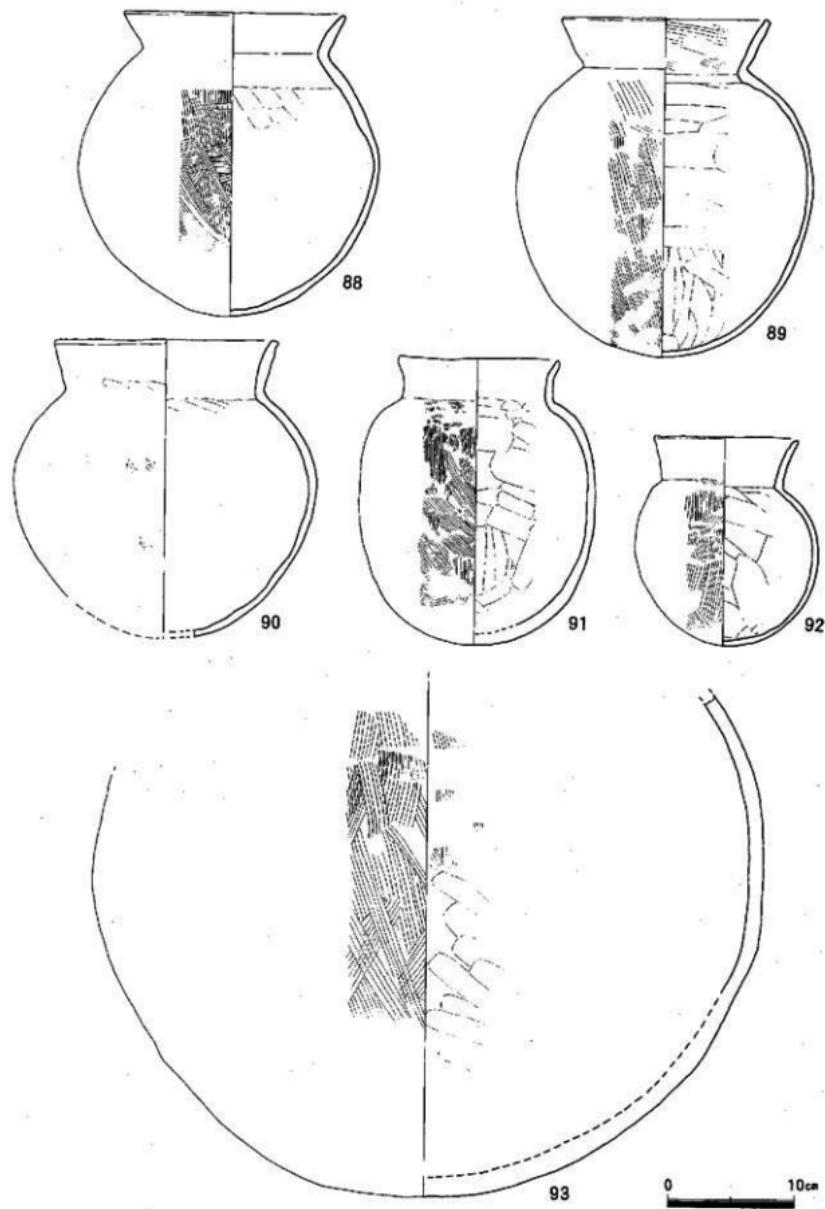
D群土器群出土遺物(第21図)

D群はC群の南側2区で、C群と同レベルで出土した。復元できたものに壺ではなく、小型丸底壺、鉢、高环から成り、特に皿状の浅鉢が多い。

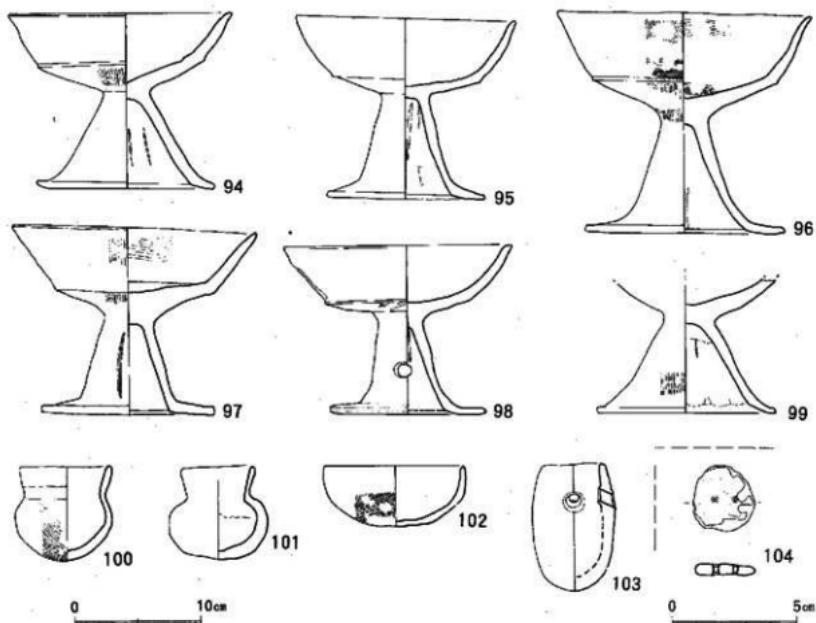
74~77は小型丸底壺で、74は胴部が浅く、底部内面に竹管状の圧痕がついている。77は小型で器壁が厚く作りが悪い。78はバケツ形の鉢で全面ナデ調整を施している。79・80・82~84は皿形の浅い鉢で、調整はまちまちである。80はかなり目の粗いハケメを施している。81は浅い湯飲み形の鉢で、内面の口縁部直下に粘土の接合痕が明瞭にある。85は台付きの鉢で、明るい色で全面ナデ調整を施している。86・87は高环で、86は端部が外反し全体的に直線的な口縁部と丸みを持つ坏下半部、87は直線的な坏下半部とあまり開かない脚部を持つ。86は器壁が厚い。

E群土器群出土遺物(第22・23図)

E群は2区と3区の境のセクションベルトを中心に、C群・D群よりやや高いレベルから出土した。出土量はC群について多いが、接合できなかった破片も多い。ここでは土器群の中心に大型の壺が正位置で座っており、その周辺に高环や壺が置かれている。上層土器群に属する。この土器群では壺が多いのが特徴で、ミニチュア土器が少なく、日常土器が多い。



第22図 SD02E群土器群出土遺物1

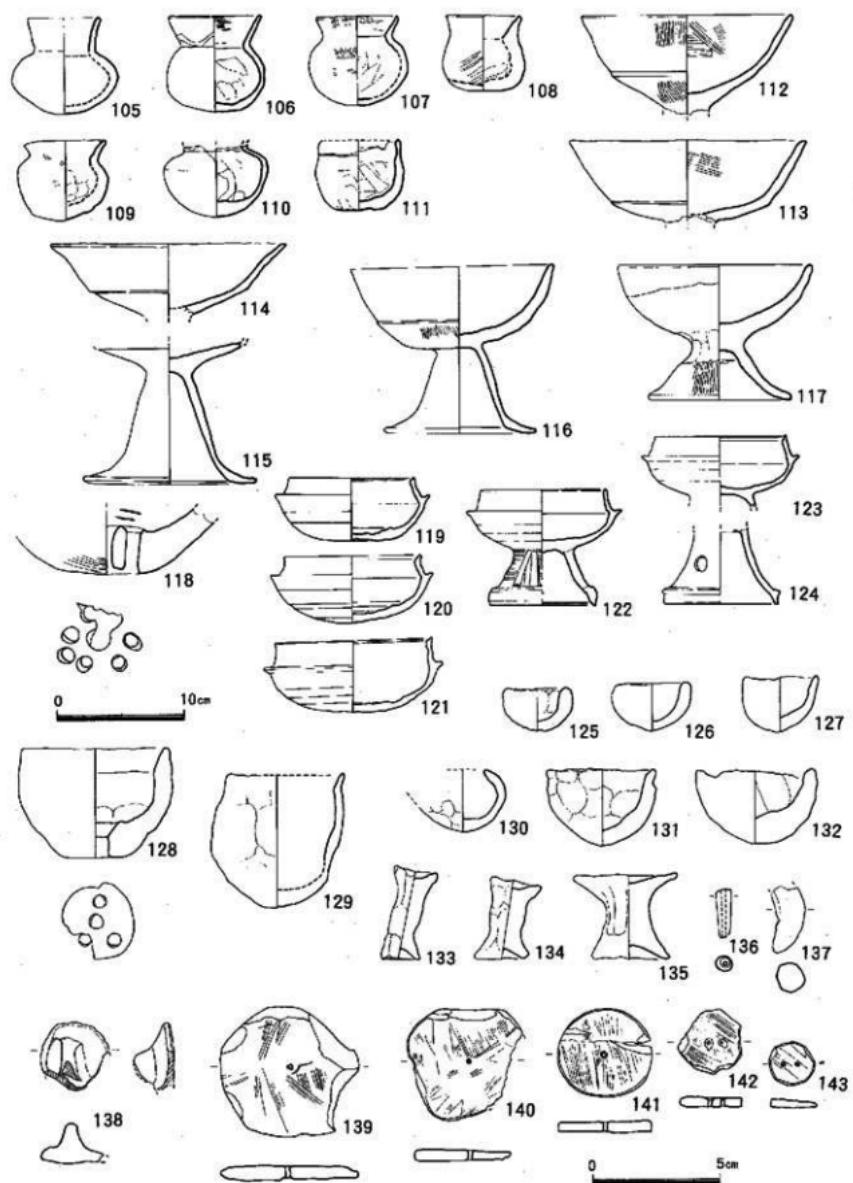


第23図 SD02E群土器群出土遺物2

88～93は壺で、88～90は球形の胴部を持ち、91・92はやや長めの胴部を持つ。88は胴上半部にススが付着している。また胴下半部には赤化している部分があり、煮炊きに使われていると思われる。89は底部付近にススらしきものが付着しているが明瞭ではなく、それ以外のほぼ全面が淡い橙色を呈しており、2次焼成を受けた痕跡は認められない。90は摩滅のため器面が荒れている。91は胴上部から口縁部にかけて灰黒色を呈しているが、煮炊きによるものかは明瞭ではない。ススは付着していない。92は91と同様に淡い色を呈しているが、底近くにスス状のものが若干認められる。また胴上半部外面の半分ほどは灰色を呈している。93は大形の壺で、ほぼ球形の胴部をもつ。外面と内面上部にはかなり粗いハケメを施している。底部は擦れてハケメがわずかに認められる。底部から胴中部にかけてススが付着している。

94～99は高環で、他の土器群と同じく形態に若干の差が認められる。特に94・99は直線的に大きく開く脚部を持ち、裾部との境に明瞭な稜を持たない。97の脚外面には縱方向の深い沈線状のものが1本施されている。98のみ2つの穿孔が施されている。調整はハケメを基本とするが、多くがナデ消している。全体的に壺壁の厚いものが多い。

100・101は小型丸底壺で、101は器壁がかなり厚く、作りが雑である。102は浅鉢である。体部と口縁部の境に稜を有することと、その後から底までハケメが施されていること、口縁部がほぼ直立することから、須恵器の壺蓋を模したものかとも考えたが、明瞭ではない。103は試掘で出土したものだがこの群に属すると考えられる鉢蓋である。104は滑石製の有孔石製品で2穴を穿孔している。径約2.5cm、厚さ4mmを測る。



第24図 SD02その他の上・中層出土遺物

その他の上・中層出土遺物(第24図)

ここでは上層・中層のA～E群以外の土器を一括して紹介する。本来は上記の土器群に属するものの、取り上げてしまったものが多いと思われる。また中には番号を付けて取り上げたものもあるが、群を成していないため、ここに含めている。

105～111は小形丸底壺である。105はほぼ直立する口縁部と横広の胴部をもち、作りの丁寧な土器である。107は比較的作りが丁寧であるが、106・108～109は作りが悪く、歪んだものや器壁が厚いものがある。111は壺とも呼びにくい器形である。調整はハケメもしくはヘラケズリが多い。

112～116は高壺である。112・116は壺部が全体的に内弯するが、114は口縁部が外反している。113・116は壺部の器壁が厚い。117は台付き鉢である。均整な形をしているが、特に鉢部の器壁が厚い。外面口縁部下にナデ調整の際にいたキズが、波打つ沈線状についている。118は瓶の底部で、器壁が3.8cmと厚い。底部中央に1穴とそのまわりに7穴を穿孔している。

119～121は須恵器の壺である。体部はいずれも深い。119は受け部がやや短く底は平底に近い。120も受け部はやや短く内傾するが、底部は丸い。121は受け部が長く直立し、容積も大きい。119・121は口唇部に沈線を施しているが、120の口唇部は平面を成している。122～124は須恵器高壺である。受け部はともに長く内傾し、122の口唇部は丸みを帯びているが、123は口唇部に沈線が走っている。脚部は短く、122は三角透かしが3ヶ所、124は円形透かしが3ヶ所施されている。

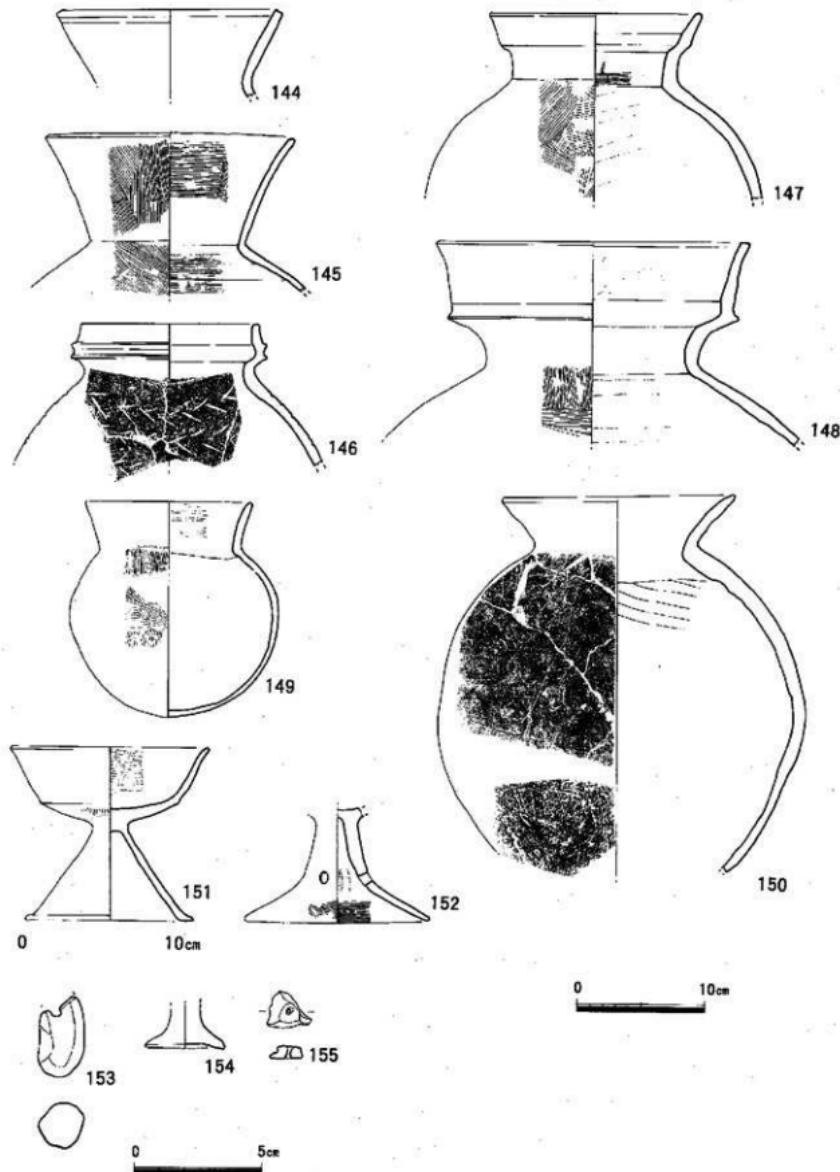
125～135はミニチュア土器である。125～127、130～132は鉢形の手づくね土器である。いずれも指ナデで仕上げられている。130は一方の口縁部が急激に内弯し、逆は直線的に外傾している。128は甑である。器壁は厚いが、丁寧にナデを施している。底部に4穴を穿孔している。129は口縁端が外反しており、壺を意識しているのだろうか。かなり歪んだ土器である。133・134は支脚か。135は高壺であろうか。136は先端部が細くなっている、土製の管玉かと考えられる。137は全形がやや弯曲しており、土製の勾玉であろう。138は上製模造鏡で、幅2.7cmを測る。中央部を摘み上げて鉢を表現しているが、穴はない。139～143は滑石製有孔石製品である。大きさ・厚さは様々である。2穴のものと1穴のものがある。

下層出土遺物(第25図)

ここでは、下層及び最下層として取り上げた遺物と、概ね鉄分の集積層より下(各層の5・6層)から出土した遺物を掲載した。各区とも6層までしか番号を付しておらず、下層遺物はその下から出土した遺物で、最下層はほぼ溝の底から出土した遺物である。中には単体で番号を付して取り上げた遺物もある。最下層からは実測可能遺物はほとんどなく、小片ばかり出土した。

144・145は口縁部が長く伸びる壺形土器である。144は全面ヨコナデ調整で、口唇部が沈線状に凹んでいる。145は両面ともハケメ調整で、頸部下の内面には段が2ヶ所ついている。粘土の接合痕であろう。144は下層出土で、145は3・4区の5・6層出土である。146～148はいわゆる二重口縁の壺で、146は短く内傾する口縁部をもつ。胴上部に貝殻の腹縁を押圧したと考えられる無難の羽状文を3段以上施している。山陰系土器かと思われるが異質な土器である。147は口縁部が短く外傾し、148は長めの外傾する口縁部を持つ。頭部は147が直線的で中への突出が少ないので対し、148は中へ強く突出し、曲線的である。また148の口縁部内面に横ナデを施しているが、最後に口縁端に向かってナデ上げている。146は4区5・6層出土、147は下層出土で、148は3区5・6層出土である。

149・150は壺形の土器であるが、149はやや中形ではあるが、表面が赤味を帯びた化粧土風で、器形からも小形丸底壺に分類した方がよいかもしれない。150は外面にらぐがき状に縦方向の沈線をジグザグに施している。149・150ともに5・6層で単体で番号を付けて取り上げた土器である。



第25図 SD02下層出土遺物

151・152は高坏である。151は口縁端部のみ外反し、坏部下半は平行に近い。脚部は大きく直線的に広がっている。152は脚中程で外へ屈曲し、屈曲部分に円形透かしを3ヶ所施している。151は2区下層出土で、152は最下層の出土である。

154はミニチュア土器の高坏である。他には手づくねの鉢形土器が数点出土している。153は上製の勾玉である。推定長約3.5cmを測る。155は滑石製の有孔石製品である。穴の部分以外は欠損している。

S D O 3 (第26図、図版6・7・9)

調査区南側を南西から北東にむけて流れている溝である。全体の幅1.3m、深さ1.7mを測る。全体の断面形はV字形に近い。土層断面では少なくとも2回の掘り直しが確認できる。ベルトの土層断面を見ると、下部の右側の線が左の壁より急傾斜で、掘り足りない可能性も考えたが、溝内には砂の堆積があり、明らかに壁の土層とは異なっている。調査区南壁の断面でも溝の右断面の傾斜がきついことから、これは本来的なものと考えられる。この右壁をこわすように掘り直しが行われており、2~4層が掘り直し後の溝の堆積である。さらにその上に1層の堆積があるが、この層の下部には鉄分の集積があり、S D O 2で見られた鉄分の集積がある溝の層に対応するものかも知れない。最初の溝は東側、ベルトの土層断面図の左側から土砂の流れ込みが認められ、後述する土器群は7層と8層、一部10層の右側に対応し、同様な傾向を示している。

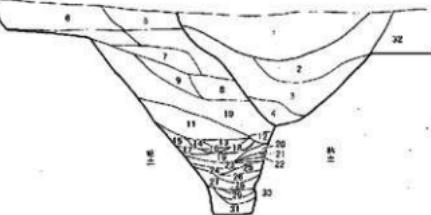
溝の中央に設けたセクションベルトを挟んで土器の集中区があった。ベルトの撤去は調査の最後になり、調査終了日の目前であったため、ベルト部分の遺物出土状況の実測は断念せざるを得なかった。土器群は前述のとおり、東岸から落ちてきたものと判断できる。そのためか、S D O 2のように、その場で割れたような状況を呈していくなく、完形に復元できた土器もさほど多くはない。土器群で取り上げた中に絵画土器が含まれていた。

出土遺物(第27・28図、図版13)

156・157は壺で、156は口径17cm、器高35.3cmを測る。両面ともハケメであるが、外面胴部中央付近にのみタタキ状の調整が見られる。内面底部はヘラのケズリ状のナデ調整を施している。下層出土。157は二重口縁の退化形態かと思われる。口縁部中央がわずかに外に張り出している。158~162は壺で、158は直線的に外傾する口縁部と球形の胴部、159は外反する口縁部と横広の胴部、160は直線的に外傾する口縁部と縦長の胴部を持つ。158はススの付着は明確ではないが、全体が黒ずんでいる。ただし器面の残りは良好である。159は胴中央部あたりにススが付着している。160はわずかにスス状の付着が見られるが、明瞭ではない。161は頸部内面に四線状のものを2条、頸部下にも1条施している。

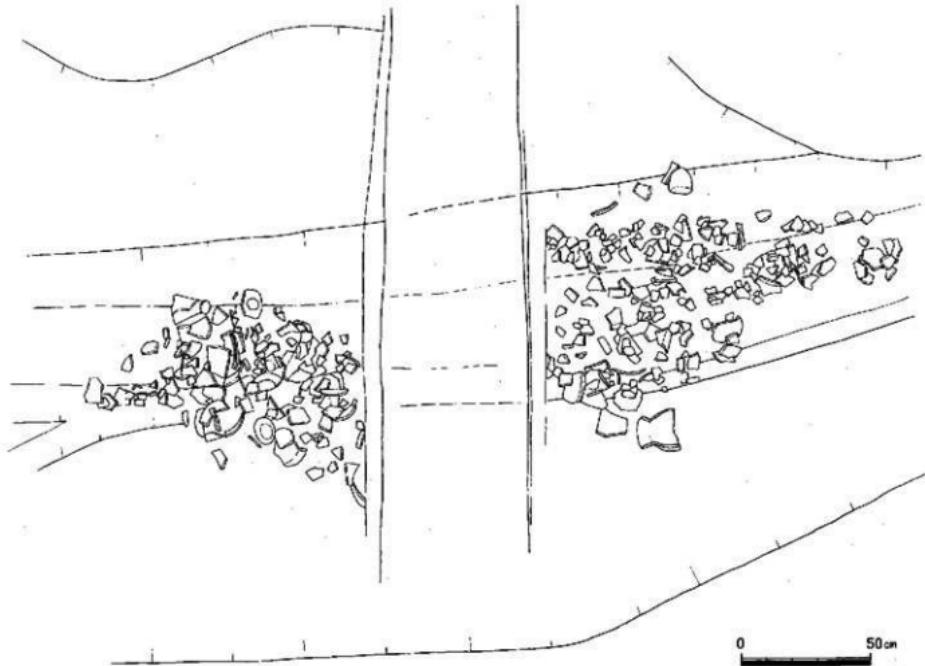
163・164は線刻による絵画を有する土器である。同一個体ではないかと推察される土器片は多くあるが、接合したのは底部(165)と線刻がある胴部のみである。163・164と165は同じ胎土・色調・調整であるが、同一個体であるという保証はない。165は器壁が厚く、外面ハケメ、内面ヘラケズリである。推定の最大径は35cm前後を測る。163は外面がハケメで、内面はハケメとヘラケズリである。当遺跡の他の上器例を見ると(95など)、上部がハケメで下部がヘラケズリであることから、163は胴上部の破片で、絵画は団のようになると思われる。絵画の現存部の最上部の位置で、裏面の調整が変わっている。また164は内面がヘラケズリで、粒の移動方向を163と合わせると団のようになる。163のみを見れば、堅穴住居に似ているが、164が団のような位置だとわからない。ただし164が上下逆ならば、堅穴住居の屋根には似ている。線刻はハケメ調整を行った後、焼成前に施している。口縁部は胎土・色調に似たものとして、157の土器がある。土器群の出土。

18.30m

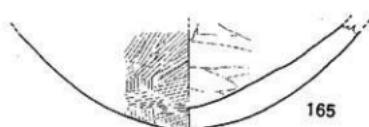
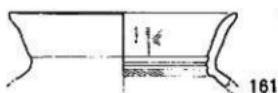
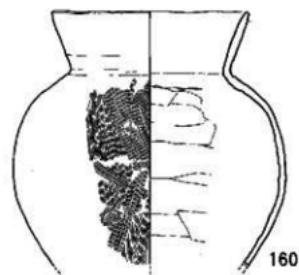
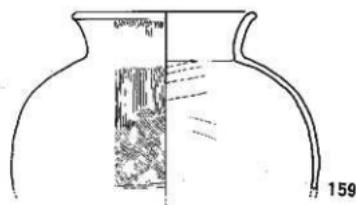
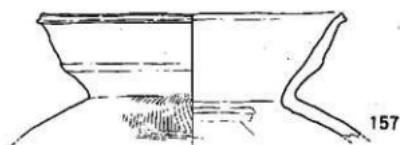
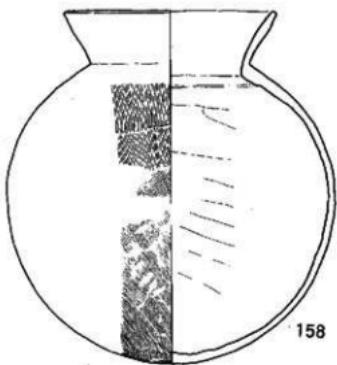
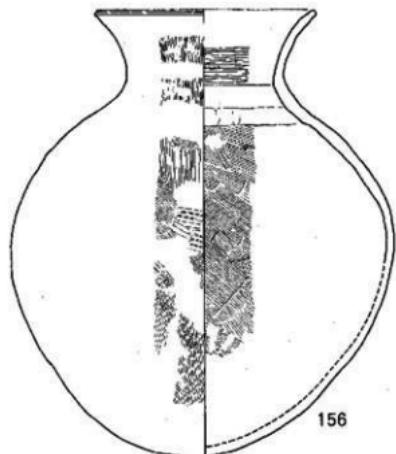


SD03ベルト北側断面

- 1 黒灰色土まじり砂
下部に黄褐色粘質土の薄い層あり
- 2 黒灰色土まじり砂(白色粒多く含む)
- 3 黑褐色砂まじり土(土器片多い)
- 4 黑色砂まじり土
- 5 黄灰褐色土まじり砂
- 6 黑褐色土まじり砂(黄灰褐色の帶状ブロックあり)
- 7 黑色砂まじり砂(1区の上層土器群に対応、嵌入り)
- 8 黑色土まじり砂(1区の上層土器群に対応)
- 9 黑灰色砂まじり土
- 10 黑灰色土まじり砂
- 11 黑褐色砂まじり砂
- 12 黑灰色砂まじり土
- 13 硫黃褐色粗砂まじり細砂
- 14 黑褐色土まじり砂(1より砂多い)
- 15 黄褐色シルトまじり黒灰色土まじり砂
- 16 硫黃褐色細砂
- 17 黑灰色土まじり細砂
- 18 黑灰色細砂まじり粗砂(下部に鉄分沈殿)
- 19 黑色細砂少量の土まじり
- 20 黑灰色シルト
- 21 黑色シルトまじり細砂
- 22 硫褐色シルト
- 23 硫黃褐色細砂
- 24 硫黃褐色粗砂まじり細砂
- 25 硫黃褐色シルト
- 26 黑灰色シルト
- 27 黄褐色シルトブロックを含む黒灰色シルト
- 28 黑色シルト
- 29 黄褐色細砂
- 30 淡黄褐色シルト
- 31 黄色粘土ブロックを含む黑色砂まじり粘質土
- 32 黑色砂まじり土(黄褐色の帶状ブロック)

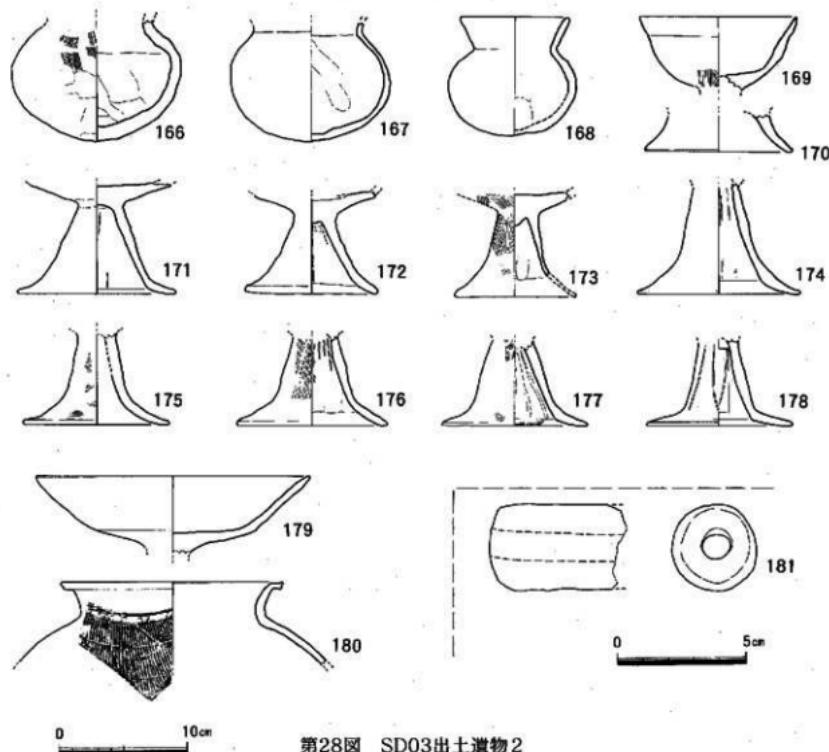


第26図 SD03遺物出土状況と土層断面図



0 10cm

第27図 SD03川土遺物 1



第28図 SD03出土遺物2

166～168は小形丸底壺である。168は比較的いい作りの土器である。169・170は台付鉢である。171～178は高環の脚部である。いずれも脚裾部の境は明瞭な後を成さず、裾部の短いものが多いが、175のように裾部のやや長いものや174のように全体が長めのものもある。178には外間に8本の縦方向の沈線が施されている。179は高環の環部で、口径21.8cmを測る。全体的に高さが低く横広がりな器形を呈している。180は須恵器の甕で、口径17.4cmを測る。口縁端部はほぼ平行になるまで外反し、口唇部は凹線状にわずかに凹んでいる。外面には平行タタキを施した後ナデ消し、内面はロクロによる横ナデを施している。181は土鍤で、断面径3.3cmを測る。

S D04

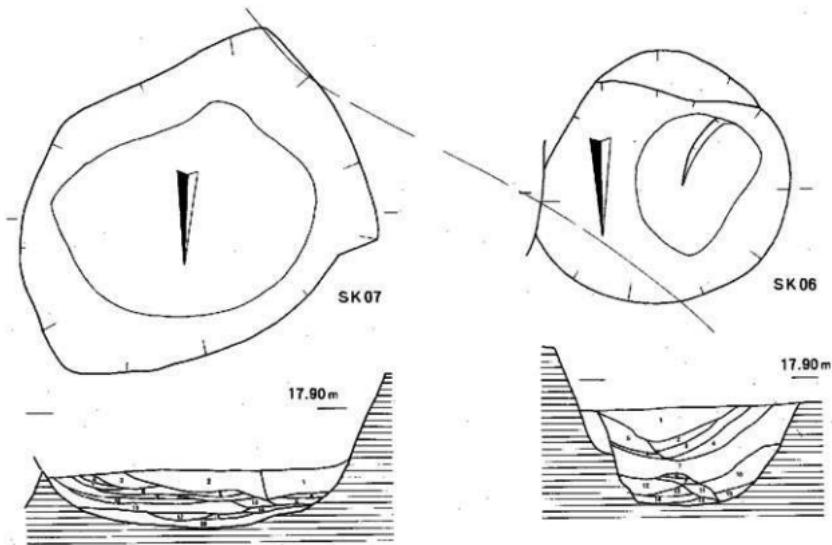
調査区西端で検出した。S D01とほぼ平行に走っている。東肩のごく一部を検出したのみで、出土遺物も極めて少ない。この溝の南側はS D05に切られているが、当初それがわからなかつた。

出土遺物

古墳時代の上飾器小片が若干出土しただけである。

S D05

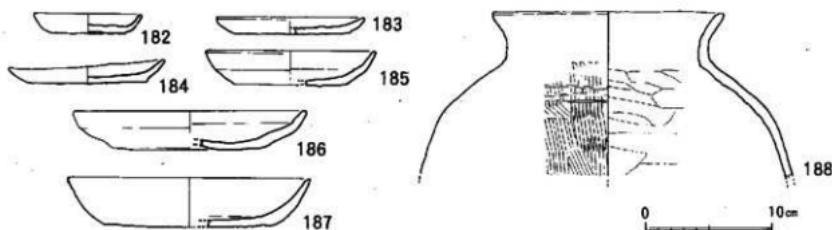
前述のように、調査当初はS D04の一部として掘っていた。S D04南側を切る。途中で屈曲して搅乱に切られているが、搅乱の北側ではこの溝は検出されていない。調査区南側断面部分での幅約2.3m、深さ約1mを測る。断面形は概ねU字形を呈するが、西側壁は途中で屈曲している。



- 1 黒味を帯びた黄褐色土まじり砂
- 2 黒褐色砂まじり土
- 3 黒褐色砂まじり土
- 4 褐色砂
- 5 黑褐色粘土まじり土
- 6 褐色土
- 7 白色砂
- 8 褐色砂まじり土
- 9 黑褐色砂まじり土
- 10 黄褐色砂まじり砂
- 11 黑褐色砂まじり土
- 12 白色砂
- 13 黑色粘質土
- 14 黑色砂まじり土
- 15 黑褐色砂
- 16 汚れん黄褐色砂

- 1 やや黄色味をおびた
黒灰色砂まじり土層(部分的に黒色土ブロックあり)
- 2 黒色砂まじり土層(白色砂ブロック少量含む)
- 3 "
- 4 黑灰色砂まじり土層
(白色粒子多く含む)
- 5 "
- 6 黑色粘質土
- 7 黑灰色砂まじり土層(白色粒子多く含む)
- 8 黑色粘質土
- 9 黑色土まじり砂層
- 10 黑色土まじり土層(白色粒子多く含む)
- 11 黑色粘質土
- 12 黑灰色粘質土
- 13 黑灰色土まじり砂層
- 14 黑色粘質土
- 15 黄色味を帯びた黒灰色砂

第29図 SK06・SK07



第30図 SD05・SK07出土遺物

出土遺物(第30図)

中世の遺物などが少量出土した。182～187は土師器の皿と壺である。いずれも糸切り底で板目痕が残っている。182は口径8.4cm、器高1.6cm、187は口径8.8cm、器高1.0cmを測る。184は口径9.1cm、器高1.4cmを、185は口径13.4cm、器高2.6cmを測る。186は口径13.8cm、器高2.3cmを、187は口径14.2cm、器高2.9cmを測る。

② 土坑

S K06(第30図、図版9)

調査区南端近くのS D02西側、S D03との合流地点で検出した。平面形は長梢円形に近い。当初S D02の一部として掘っていたため、土層断面は途中からしか残せなかつた。断面形はU字形を呈していると考えられる。上層はかなり細かく分けられるが、一部通常の土坑の堆積と異なる部分があり、後述するS K07の位置も合わせて考えれば、S D02とS D03の合流地点に関連する何らかの遺構と考えることができる。長径2.8m、短径2.2m、深さ約1mを測る。

出土遺物

古墳時代の土師器が少量出土した。

S K07(第29図、図版9)

調査区南端近くのS D03東側、S D02との合流地点で検出した。S K06に対するように両溝の東側に位置している。平面形は円形を呈する。当初S D03の一部として掘っていたため、上層断面は途中からしか残せなかつた。断面形はU字形を呈していると考えられる。土層は掘り直しのような堆積の部分が認められる。種々の状況からS K07とともに、S D02とS D03の合流地点に関連する何らかの遺構と考えることができる。直径約2m、深さ約1.3mを測る。

出土遺物(第30図)

古墳時代の土師器が少量出土した。188は壺で、口縁部は外反している。外面頸部付近が赤いが、本来の色調と思われ、剥げている部分が多い。スヌは付着していない。外面は器面がやや荒れているが、火を受けた痕跡は認められない。

3-4まとめ

今回の調査は始めに述べたとおり、期間的制約の中で十分な調査を行うことができず、特に期間の終わり頃はかなり粗い調査になってしまった。その中で、古墳時代における水利開発と祭祀に関して大きな成果を上げ得たと考えている。以下、項目ごとに若干のまとめを行いたい。

溝の開鑿時期と早良平野の水利開発

今回報告した出土遺物のほとんどが土器群の出土で最後の掘り直しの溝、つまり鉄分の集積層から上の層からの出土で、一部その下の層出土のものを含んでいる。ただしS D03は鉄分集積層より下からの出土である。いずれにしろこれらの遺物は開鑿時期を示すものではない。下層遺物は比較的開鑿時期に近いと考えられるが、かなり層的に厚く、開鑿時期にどれくらい近づくかわからない。

下層遺物を見ると、SD02・03ともに完形品はほとんどない。圓化した大形の破片では、SD02では146や148の二重口縁壺を見ると、146は口縁部が短く異質な土器であるが、ともに急激にカーブする頸部をもつ。ともに図に示した部分以外の破片が多くある。144・145の壺は直線的に外傾する口縁部と径の小さな頸部をもつ。これらの特徴は概ね柳田編年のⅡa～b期前後に位置付けられよう。147の壺は退化気味の二重口縁を持ち、頸部も直線的になっている。Ⅱc期からⅢ期にまで下るかも知れない。151の高壺も深い壺部と平坦に近い壺下半部から同様な時

期と考えられよう。一方溝の底近くから出土した最下層の遺物は出土量が極めて少なく、時期のわかる遺物も少ない。唯一岡化できた152の高環脚部は長めの脚裾部をもち、古い様相を示している。

溝の土層図をあらためて見ると、溝の比較的下部まで掘り直しがあり、下層でも開墾時期からやや離れた遺物が出上する可能性は高いと考えられる。従って、これらの状況を総合的に考えれば、溝の開墾時期は5世紀前半を下限とすることができる、4世紀前半～中頃の土器に大きな破片が多いことを考えれば、この時期に近い時期をこの溝の開墾時期と考えられないだろうか。

早良平野では弥生時代後期～古墳時代前期にかけて大溝の開墾が行われている。原遺跡8次調査では弥生時代後期の開墾、4世紀中頃の埋没が推定されている。同じく原遺跡3次では、自然河道と思われる人溝とそれから分かれる7条の溝が検出されている。各溝の時期については記述がないが、溝の中には4世紀代の遺物を多く含むものがある。原3次調査ではさらにはさかに検討が必要だか、弥生時代初期の自然河道の利用に比べて、古墳時代初頭前に新たな水利開発が行われた可能性がある。

福岡市次郎丸遺跡では開墾時期は不明であるが、5世紀前半の埋没が推定されている。土層断面等の記載がないため詳細な情報は不明なもの、溝の深さや出土遺物から検討すれば、開墾時期は弥生時代後期～古墳時代初頭頃であろうか。その他、弥生時代前期以降早良平野では河川に堰等を設けた水利施設が作られているが、上記のように弥生時代後期から古墳時代初め頃にかけて川から水を導入する溝の掘削が行われている。この時期にこのような水利開発が行われていることの意味についてはわからないが、それは原遺跡3次調査のまとめにあるように、室見川全域をとおした指導者層の存在を裏付けるものかも知れない。

当遺跡ではこれらの溝が廃棄された後に開墾されている。現在、早良平野におけるこれらの水利開発に伴った溝は、点での発見であり、今後これらの溝が線・面として把握されれば、古墳時代における水利開発の一端が明らかになろう。

祭祀遺物について

当遺跡のSD02土器群から出土した遺物は、出土した須恵器の壺が受部が長く容量も大きいこと、高环の脚は短く平面長方形の透かしが三ヶ所あることなどの諸特徴から5世紀末～6世紀初頭頃に位置付けられると考えられる。土器群の遺物は本文中で述べたとおり、この溝の最後の時期、溝が廃絶されたのに伴っていると考えることができる。溝の開墾とは約100～150年間の開きがあり、この間溝は何度も掘りなおされて（あるいは自然による流路の変更が行われて）いる。一方SD03は層的に鉄分集積層の下から土器群が出土していること、出土遺物の大半がやや古い様相を呈していることから、5世紀代の祭祀と考えられる。前項に述べたとおり、早良平野では、弥生時代後期以降、新たな水利開発が行われており、それによって開墾された溝の中には4世紀半ばにはすでに廃棄されたものがあり、その廃棄に伴って次郎丸遺跡や原遺跡では祭祀が行われている。

今回、残念ながら大量に出土した祭祀遺物を検討するだけの時間的余裕がなく、詳細な情報を提供できないか、おおまかな傾向を述べると、SD02では溝がほぼ埋まりかけたかなり短い時期に何度も祭祀が行われている。その中には壺を中心とする生活遺物を中心にしたE群、高环が多いA群、小型丸底壺と土製品の多いC群という特徴がある。これらの特徴がどういう意味を持つのか、今後の検討課題としたい。

壺と壺

今回報告する上でもっとも悩んだのが、壺と壺の分類である。SD02土器群の時代はすでにいわゆる外来系二重口縁壺も在地系の壺も姿を消した時代であり、どの器形を壺あるいは壺にすればよいのかわからなかった。本文中では、整理時に記載した器種（壺・壺）をそのまま記載した

が、本文中にスス等の記載のないものもあるので、改めて主な土器についてのみであるがここで検討してみたい。

A群1はほぼ全面黄褐色でススが付着している。2は全面橙色で本文中にはススはないはあるが、再度点検すると明瞭ではないもののスス状のものがわずかに認められる。器面の荒れがひどくあるいは二次焼成を受けているかも知れない。B群21は本文では壺に分類しているが、約半分にススが付着している。C群では、29にはススがわずかに胴最大部に認められる。30はスス・コゲともに認められない。ただし底近くは赤くなっている。31もスス・コゲともに認められない。32は全体は黄褐色を呈し、ススが胴部最大径より下に多くついている。底部周辺の一部が赤い。コゲはない。33は二次焼成は認められない。小型の34は本来橙色だがほぼ全面黒化している。土器焼成時の黒化ではなきそうだが、明瞭ではない。幾あるいは壺が多く出土したE群では、88は全体は橙色を呈し、胴部最大径より上の約半分にススが付着し、底部周辺が赤い。また内面の周囲もやや黒い。89は全体が橙色で、胴部最大径下にススが付着している。また底部の一部が赤くなっている。90は器面の荒れがひどくわからない。91は全体的に灰黒色を呈するが、ススはわからない。92は小型のものだが、胴部最大部の下にススが付着。内面にこげ状のものが付着している。底部は赤くない。さらにC群の小型丸底壺に近い器形の中にもススが付着しているものがある。

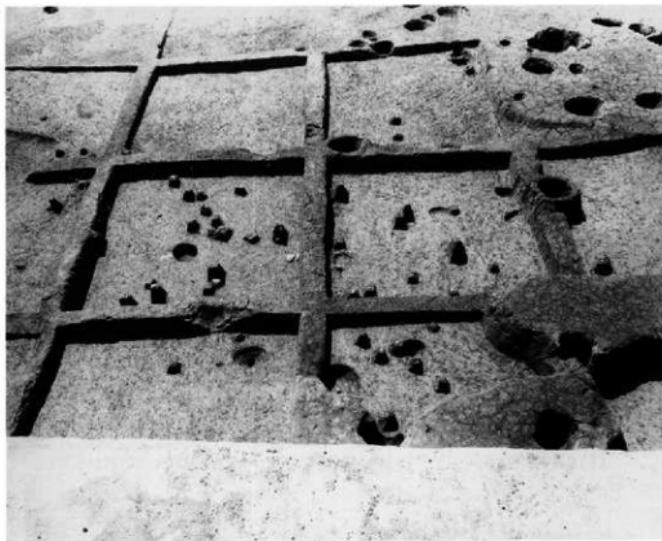
以上、本文中の繰り返しを恐れずに列記したが、土器を焼成した後に、煮炊きなどで火を受けた証拠はススが残っていないものや、器面の剥落がないものについては判断が難しい。以上の土器をながめると、器形の違いによるススの付着・底部周辺の赤化等の差は認められない。例えば、口縁部が直立し胴長になりそうな21のような土器にススが付着しているし、小型丸底壺がそのまま大きくなつたような丸い胴部をもつ88のような土器にもススが付着している。一方ほぼ明らかにススが付着していないのは、36・37のような小型丸底壺がやや大きくなつたような器形で、器壁の薄いものである。ただし同種の器形でも上述のように88のようなやや器壁の厚いものはススが付着している。古墳時代前半期においては、二重口縁のものと頸部がしまり口縁部の長いもの(いわゆる在地系の壺)を壺とし、それ以外の布留系の丸い胴部を持つものを甕としているものが多い。それはおおまかに煮炊きの有無に対応している。ただしいわゆる小型丸底壺は字のとおり壺に分類されている。しかしSD02の上器群の時代(5世紀末~6世紀初め)になると、すでに須恵器の時代に入つており、二重口縁や頸のしまった長い口縁部をもつ壺は存在しない。前述のような土器の壺と甕の差がなくなつてしまつてゐるか、もしくは甕自体がなくなつてゐるのではないか。これは須恵器の甕の出現によるかもしれない。須恵器の甕は甕とはいうものの、貯蔵用のものである。自明のことかもしれないが、弥生時代のように名称としての甕=煮炊き、壺=貯蔵の図式がこの時代の土器・須恵器にはあてはまらないことが追認できたと言える。

とするならば、本文で分けた甕・壺という名称を今後どうすればよいのか。考古学的な手法である器形の分類を行い、それと用途を組み合わせるということを今回はまったくできていない。前後の時代を眺めながら、当該時期の遺物を仔細に検討すれば自ずと明らかにならう。

図版



(1) 第7次調査全景(東から)



(2) SK15遺物出土状況(北から)

図版2



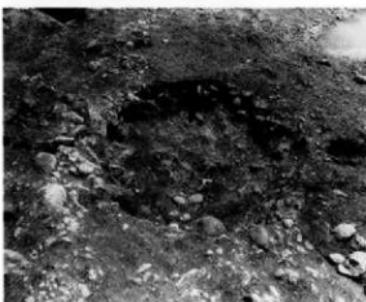
(1) SK 14(南から)



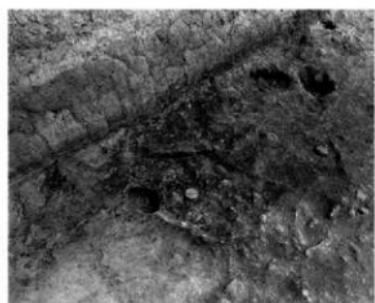
(2) SK 11付近(南西から)



(3) SK 10(北から)



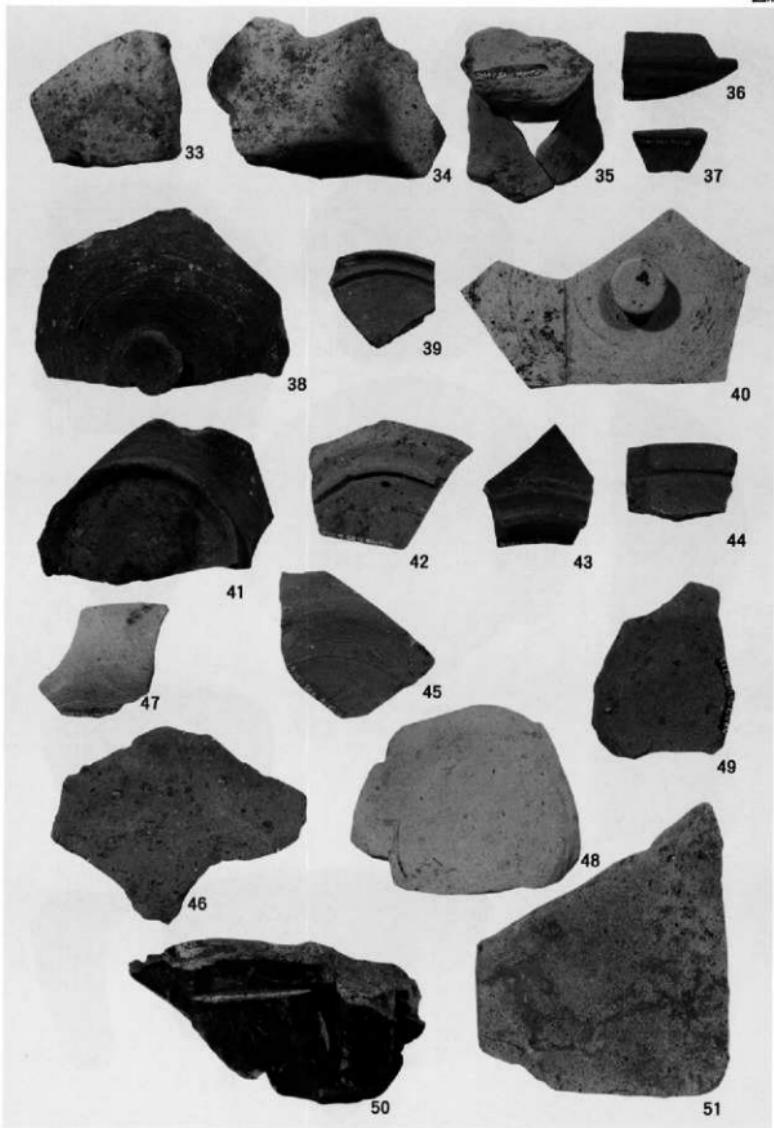
(4) SK 12(北から)



(5) SK 13(西から)

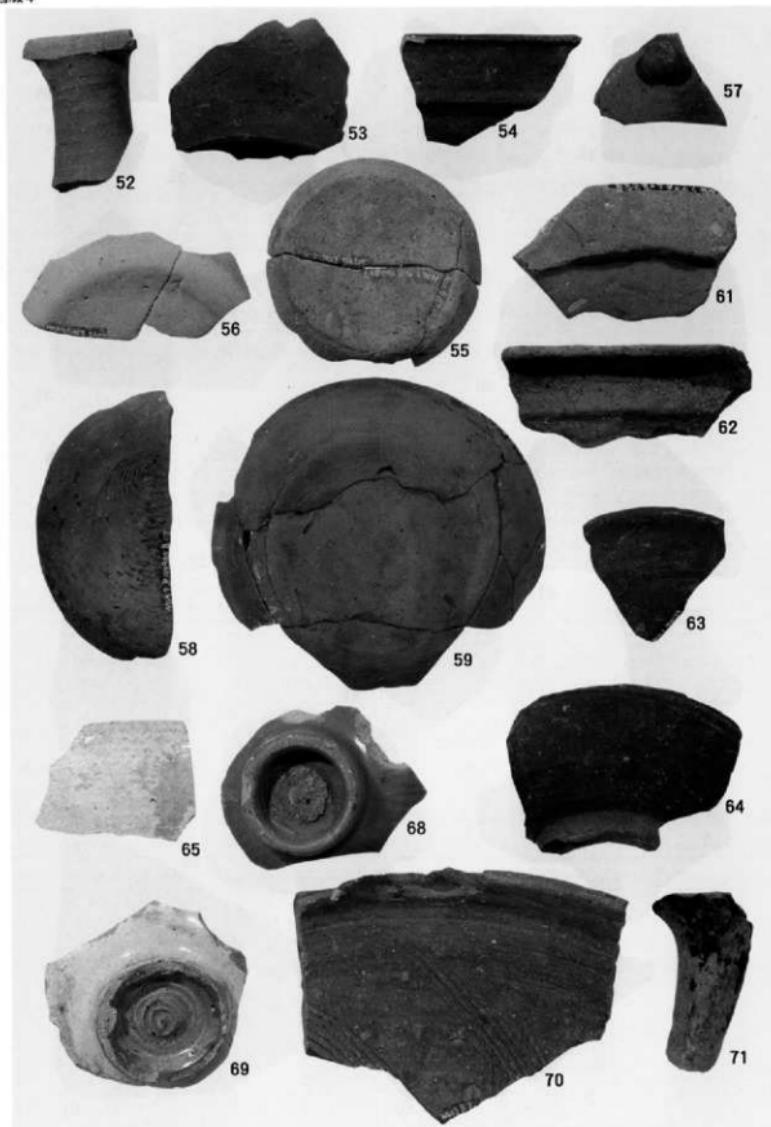


(6) SD 01・05(東から)

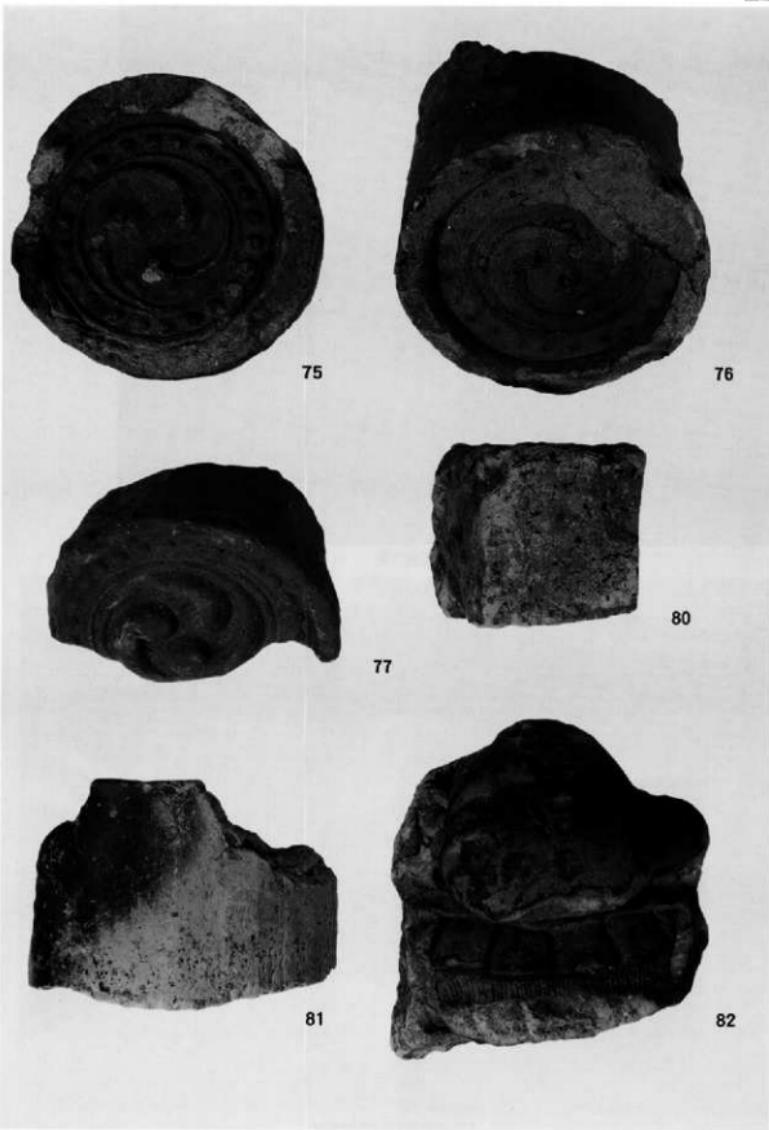


出土遺物 I (SK11)

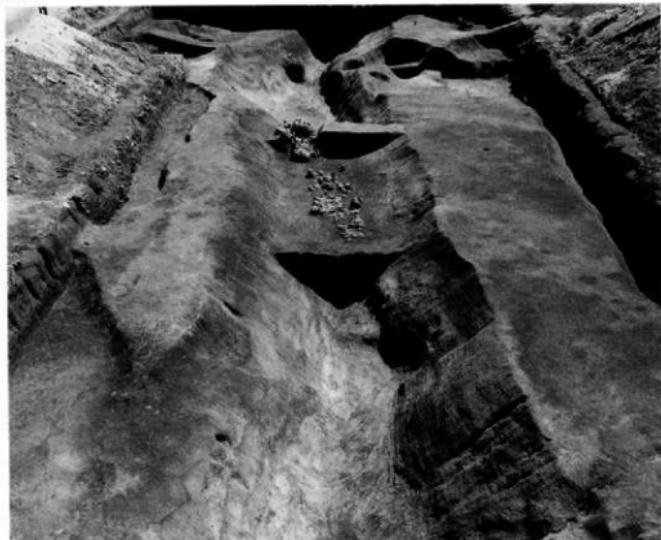
图版4



出土遗物 II



出土遺物Ⅲ



(1)第8次調査全景



(2)SD02.03合流地点



(1) 调查区南壁土层断面



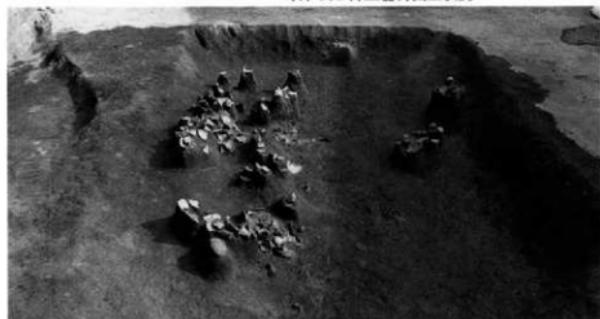
(2) SD 02 北壁土层断面



(3) SD 03 土层断面



(1) C,D群土器群出土狀況



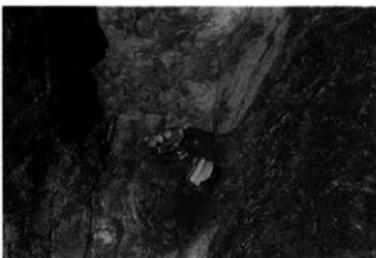
(2) A群土器群出土狀況



(3) E群土器群出土狀況



(1) SD 02下層遺物出土狀況1



(2) 同2



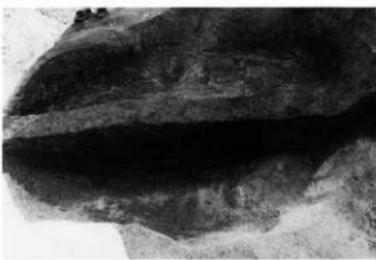
(3) SD 03遺物出土狀況



(4) SD 01



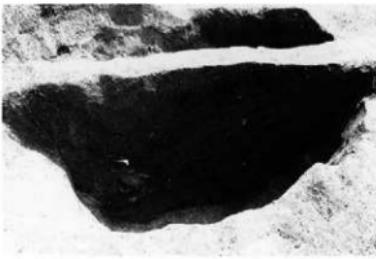
(5) SD 04



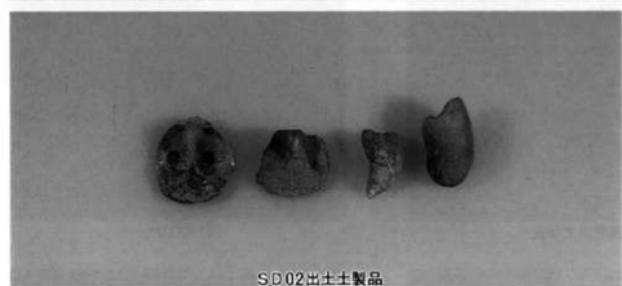
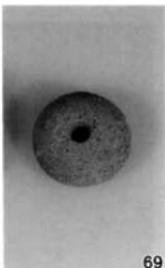
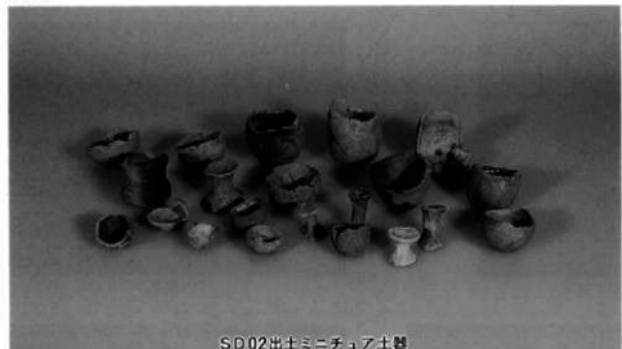
(6) SK 06



(7) SK 07



(8) 同土層斷面





图版12



146



152



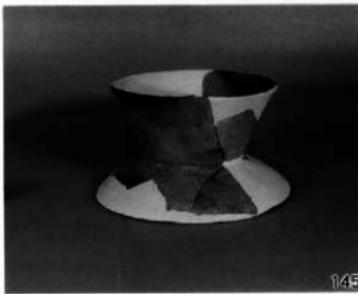
148



147

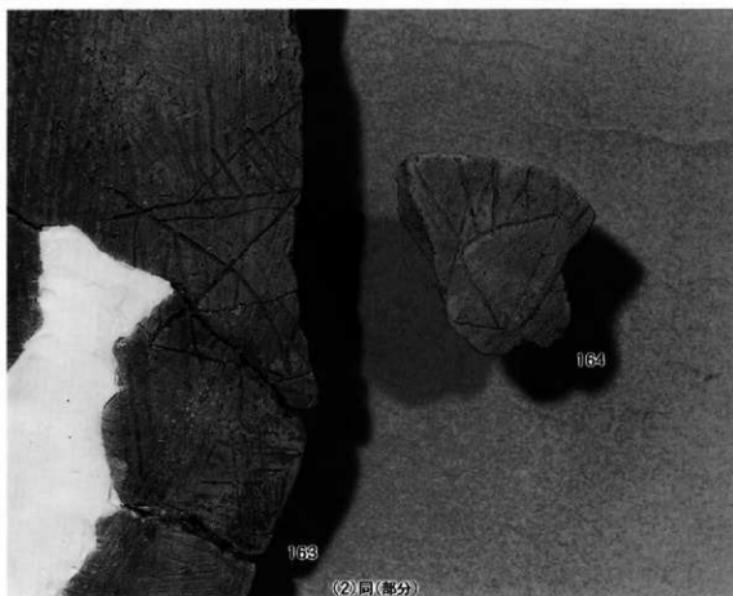
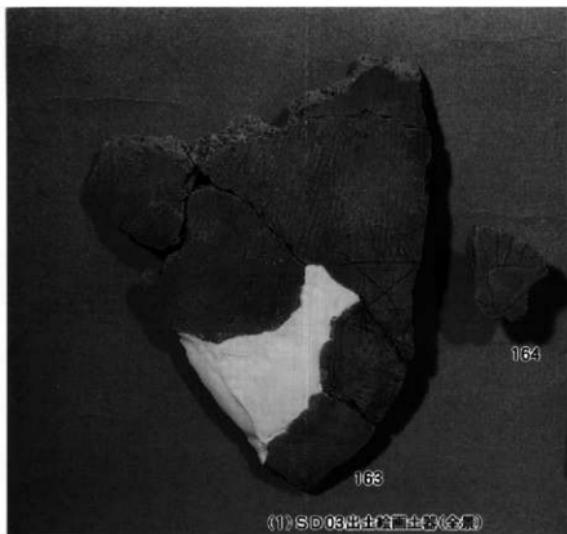


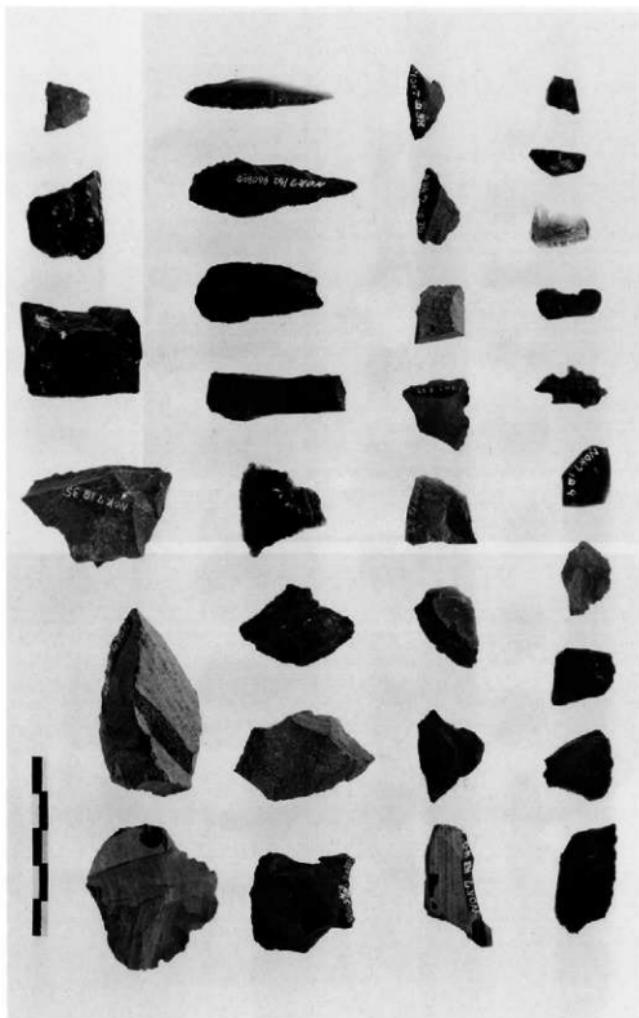
146



145

出土遗物Ⅲ SD02下层出土遗物





第7次調査出土旧石器時代遺物

野芥遺跡3

第7次・第8次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集

1998年(平成10年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 友誠社印刷有限会社
福岡市南区大楠一丁目26番20号